

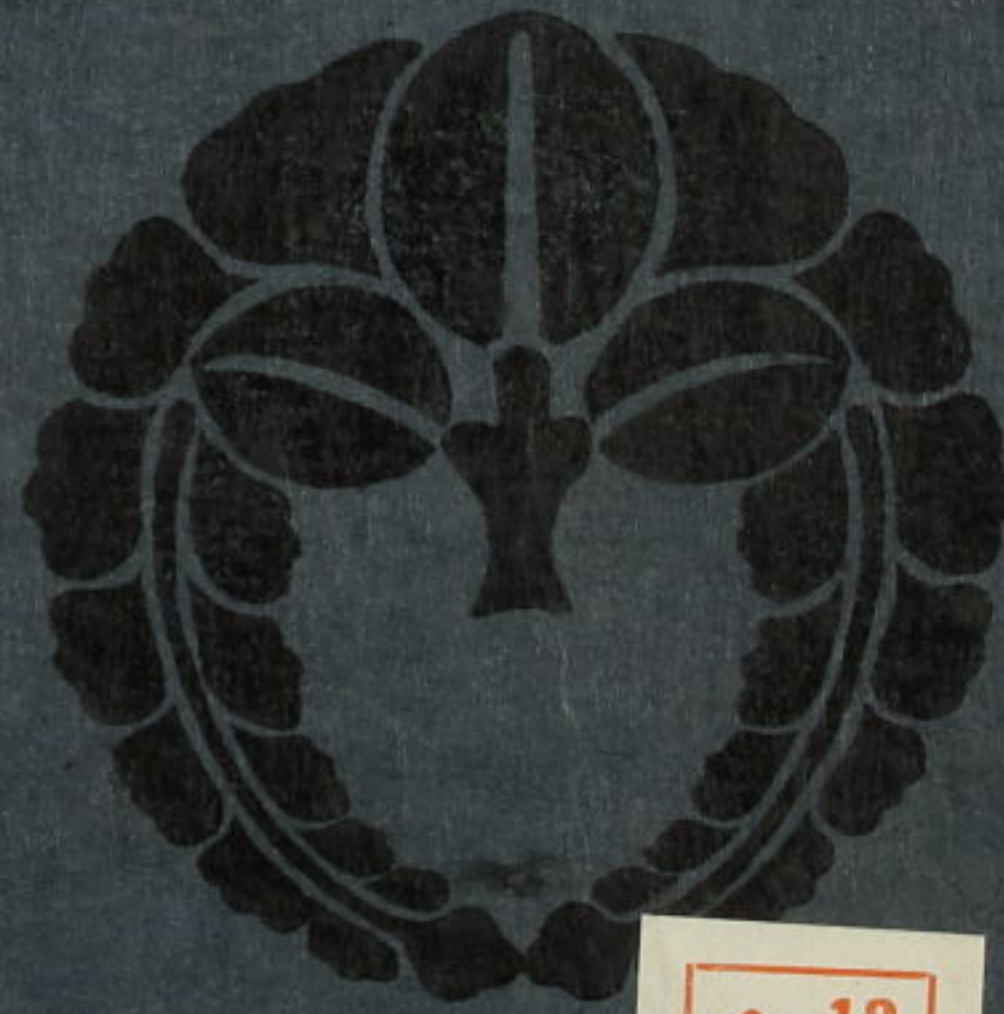


妙見
感應

清正真傳記

初篇

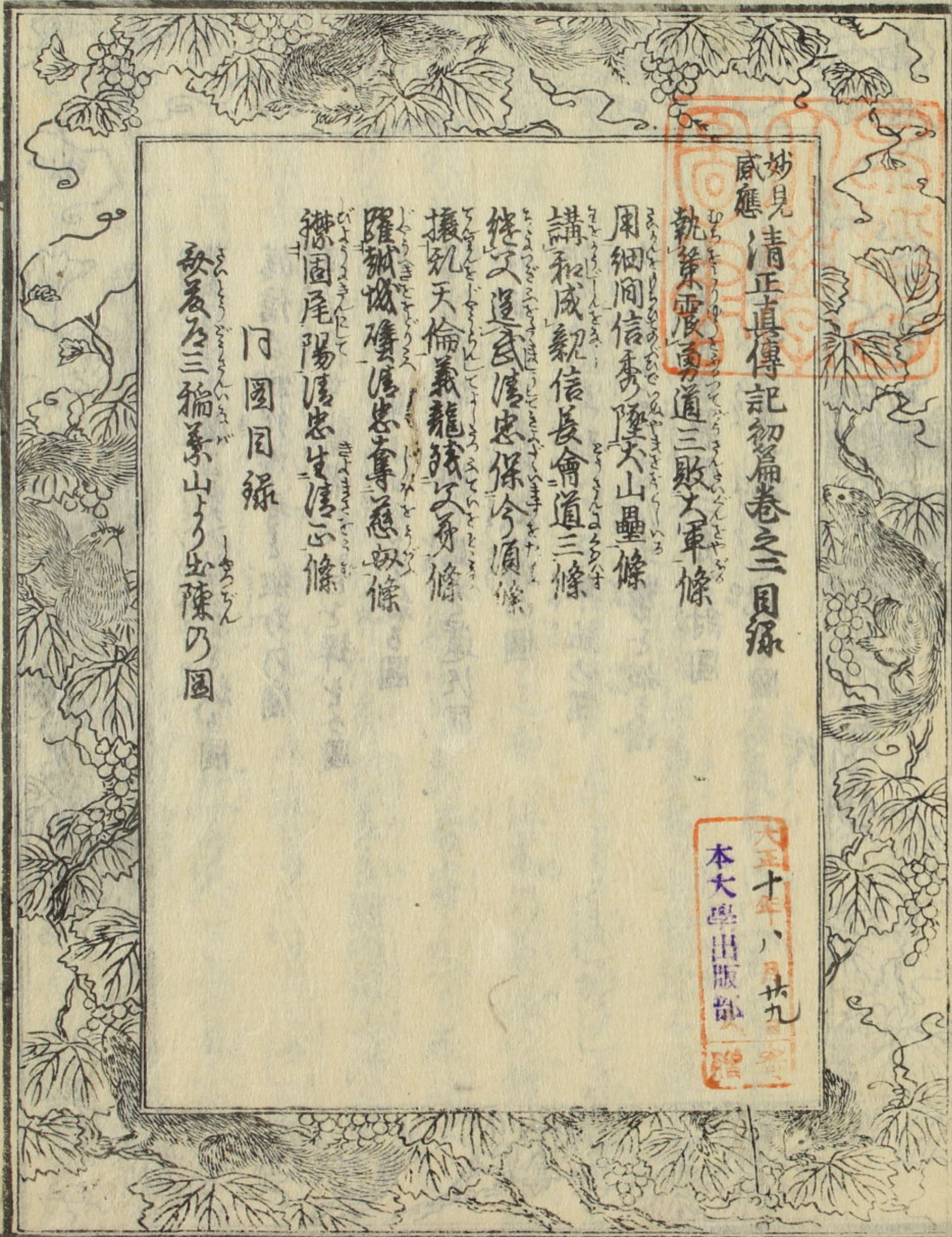
二



~ 13
3333
2



18
3333
2



妙見 威應 清正真傳記初篇卷之三目錄

執業震道三殿大軍條

用細間信秀陸天山壘條

講和成親信長會道三條

修文道武信忠保今頃條

攘亂天倫義龍談父子條

躍城城磯信忠奪慈奴條

繼國尾陽信忠生信正條

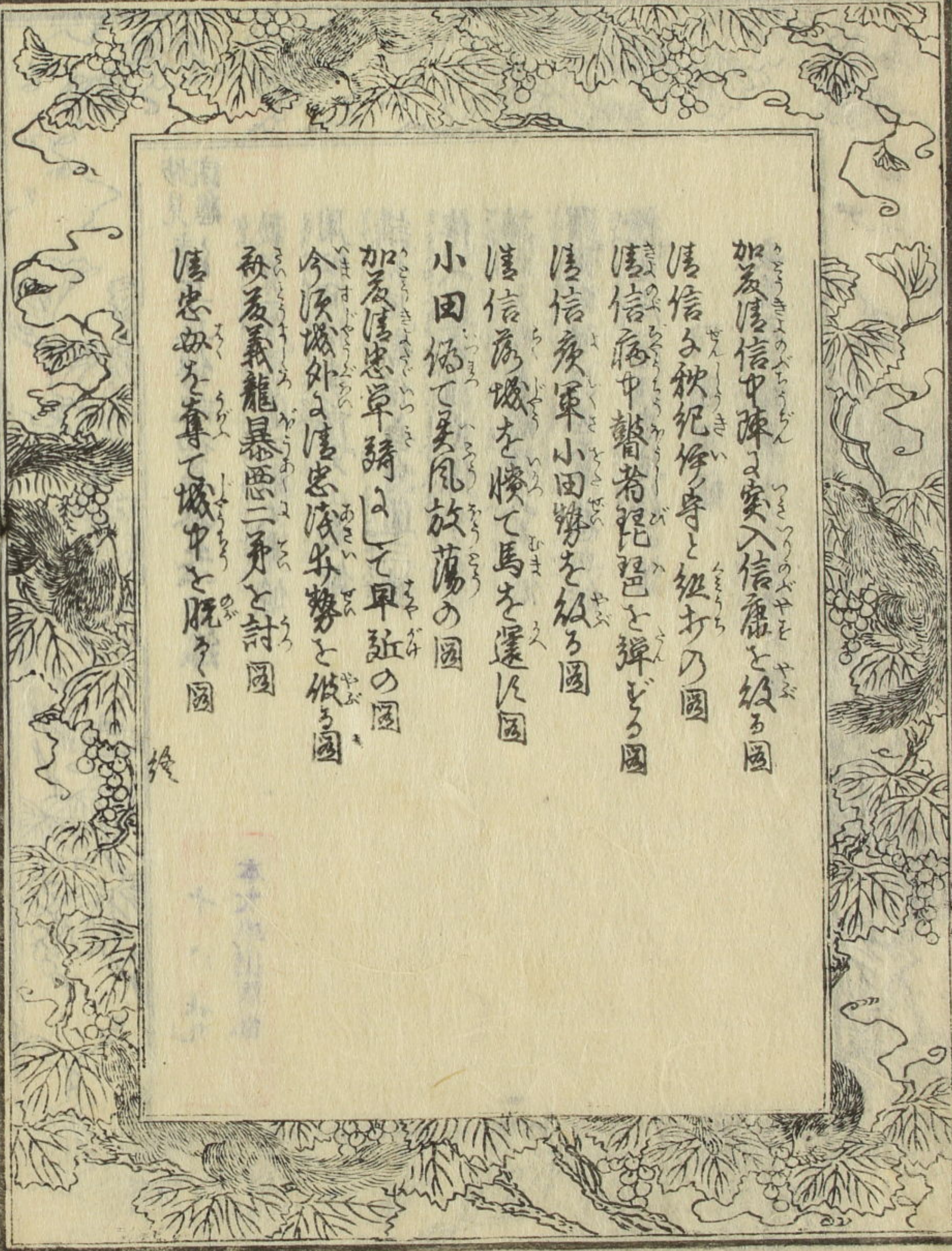
日國目錄

致及乃三輪景山より出陣乃國

大正十年八月廿九
本大學出版部

清正記卷之三

加茂信忠中陣に突入信康と戦ふ國
 信信子秋紀修守と組む國
 信信病中警者毘野と陣む國
 信信夜軍小田將を放る國
 信信夜城を懐て馬を還る國
 小田將て是風放蕩の國
 加茂信忠早請はして早返の國
 今頃城外に信忠夜兵勢と戦ふ國
 加茂義龍暴悪二弟と討國
 信忠母を奪て城中と脱る國



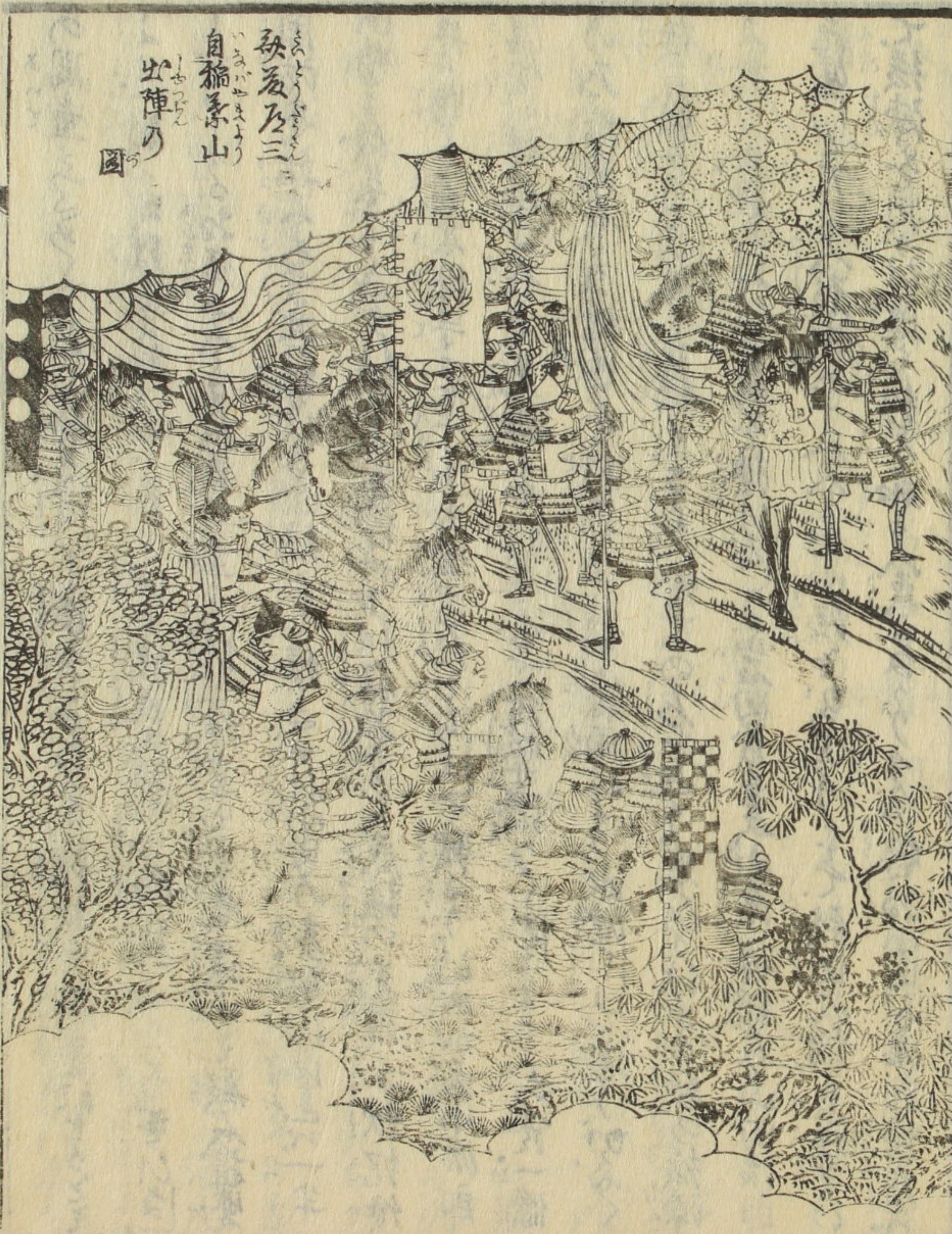
清正傳記初篇卷之三

執業震震勇道三敗大軍條

加茂小治郎信信武術の達者強き方々、母養家仕仕天文元年十一月
 光母信康又許て死あり、後関信治郎兼右女曾孫を娶て妻と
 し、翌三年十月、男子出生せり。生じ立勝ててとさほかりし、初名を
 信康と名け、長毛を養ふ。信と信と之却説、初乃美信の敏、土波大
 膳を交、飛鷹大末は、後尾張國小田家の寄客なり。志さるに、中
 國邊境のものを教ふこと、大佐後守信康、お長多國の戦、渡るべき
 こと打捨、並に、信にあり、信と信僧を遣、大能なるに道三少し、信に
 信は、九月七日、信に、信と信、信と信、信と信、信と信、信と信、信と信、
 信康を大將とし、お長、お長、お長、お長、お長、お長、お長、お長、
 修守、毛利を十郎、修守、修守、修守、修守、修守、修守、修守、修守、

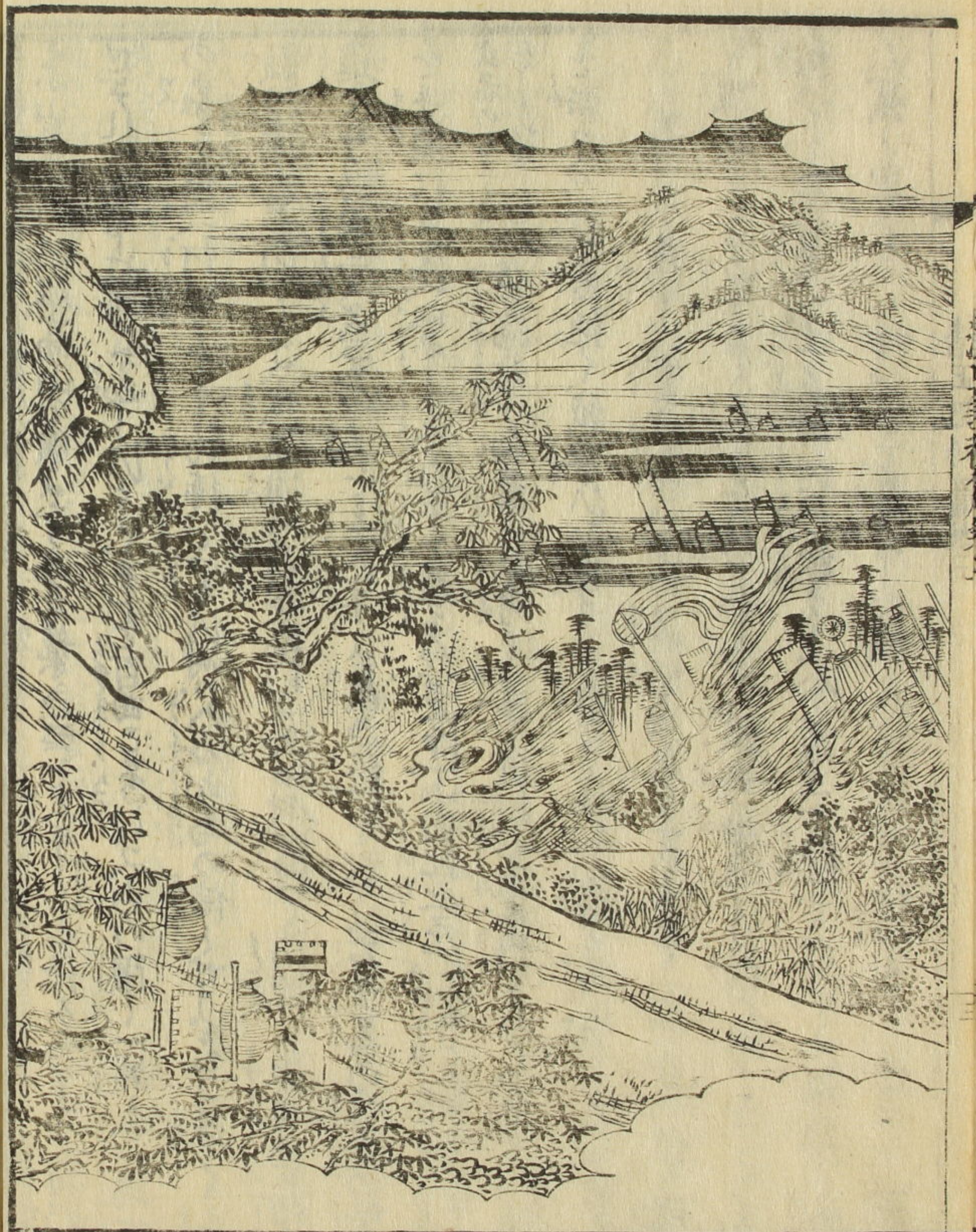
日廿二日秋の二更の夜、高嶺の城を打立、腰の掛り松をうて、後うぶじ。
其川に返回れ、海を押し、不意に城下を攻入、と曉天に返回れ。
海は又、馬武者を先陣に、歩卒その後、陣の傍、勝つたる間、
川を渡、真平地、得野村、押寄せ、民屋をえり、神社佛場、一故
に、放火せり、空を天にひびく。旌旗、東西に翻り、小田の先陣、秋紀、
守、輪、山、の、城、下、と、美、近、う、城、下、れ、周、章、大、方、か、り、旗、子、と、逢、ま、に、抱、
初、歩、陣、の、老、人、の、健、か、る、者、の、お、も、又、踏、殺、せ、し、男、女、一、日、の、啼、哭、を、
喚、大、叫、喚、の、衆、人、衆、湯、の、中、に、墜、ち、ん、し、初、や、と、斗、は、凄、しく、思、ひ、
あ、り、し、る、復、恨、せ、る、も、理、く、道、三、勇、氣、万、人、の、勝、た、る、老、は、し、し、
火、種、橋、の、釣、鐘、を、ひ、く、せ、出、馬、を、せ、の、お、寄、を、し、其、身、の、胆、丸、の、具、足、と、
を、て、肩、より、げ、り、は、陣、刀、を、付、け、烏、丸、と、名、付、け、る、曲、進、退、の、名、馬、の、
扱、で、扱、増、より、五、手、と、誇、り、城、門、一、丈、多、く、用、せ、り、柳、道、城、の、要、を、

赤山第一の徳、高山の頂、本丸を築き、要と大手と、橋をうて、
せ、ざ、れ、い、城、下、れ、所、を、ひ、く、し、を、百、曲、と、号、け、山、の、隈、に、
の家を構へ、竹、射、と、し、釣、鐘、と、寄、り、射、り、入、り、出、馬、の、信、と、せ、り、
腹の諸士、思、ひ、く、戎、衣、固、り、大、お、城、門、を、射、り、
進、み、り、道、三、勇、氣、を、馬、と、立、老、手、を、長、き、
を、手、綱、に、え、流、し、大、軍、と、眼、り、見、し、小、田、比、丘、
武者の三、三、の、儀、痛、者、が、白、昼、に、寄、り、来、り、
を、斬、り、武、器、純、く、秋、誓、い、と、
い、ひ、な、ぐ、秋、中、に、重、武、具、を、う、け、遠、信、
と、攻、ん、と、も、る、糸、自、り、を、結、と、や、云、ん、我、兵、居、る、
秋、て、り、三、幸、之、必、定、勝、利、の、秋、を、う、
ん、我、と、思、ふ、者、の、續、け、や、と、暮、ら、に、坂、を、り、

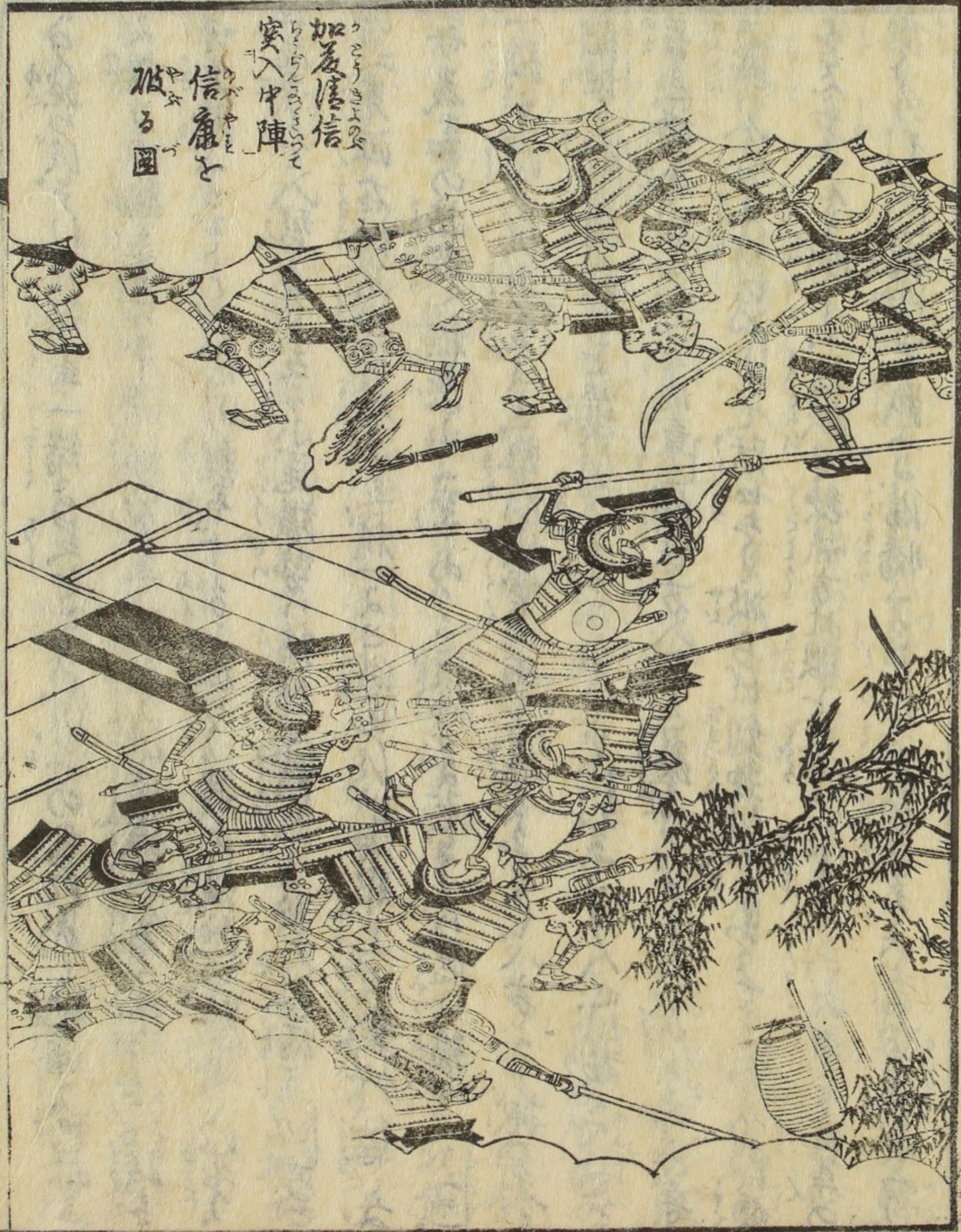


三乃及後
自稱系山
出陣の
圖

吉三尼力篇卷二



河上寺本卷二



清正記力第卷三



清正記力第卷三

信長と秋
紀伊守組
の國



清正記幼篇卷三



清正記幼篇卷三

け蘇丸のちの其他何者ありとも不知者悪七去浦系法が帯るるあり
系法は熱回大宮司が聲して平家西海よりびく後鎌倉に抄りて捕りて
はき裁後りく育用とあり蘇丸をば熱回大宮司の件に送り世に大宮
司家より傳へてを紀伊守や清て是料とせりともやれ又山越法を
か捕りては「あつせ」腰を放て其年月國大垣合戦の日も落軍
下知るとも牛屋の寺内は陣し床几のわたり諸卒は指揮し
居りしが流矢来り右の眼よりしり其矢を授え間うく又一世に
の流矢とて左の眼と射候る是より後けを刀丹羽に即ち傷門長秀の
手に入重宝とせらるるが後りて西眼を射ひ易者も命にたりしり小
是右のれ来りてと中はより板し心付熱回大明神に奉祀せらるる
眼病を不に表すりともり

其日の合戦小田家大に種を起し死傷殺とありは英濃方より
はしり者と歎ひ道三諸士は恩賞を射ひ是も信信が戦功比は
働きありとて因幡守に尾張國大山の城をぞ取けらるる

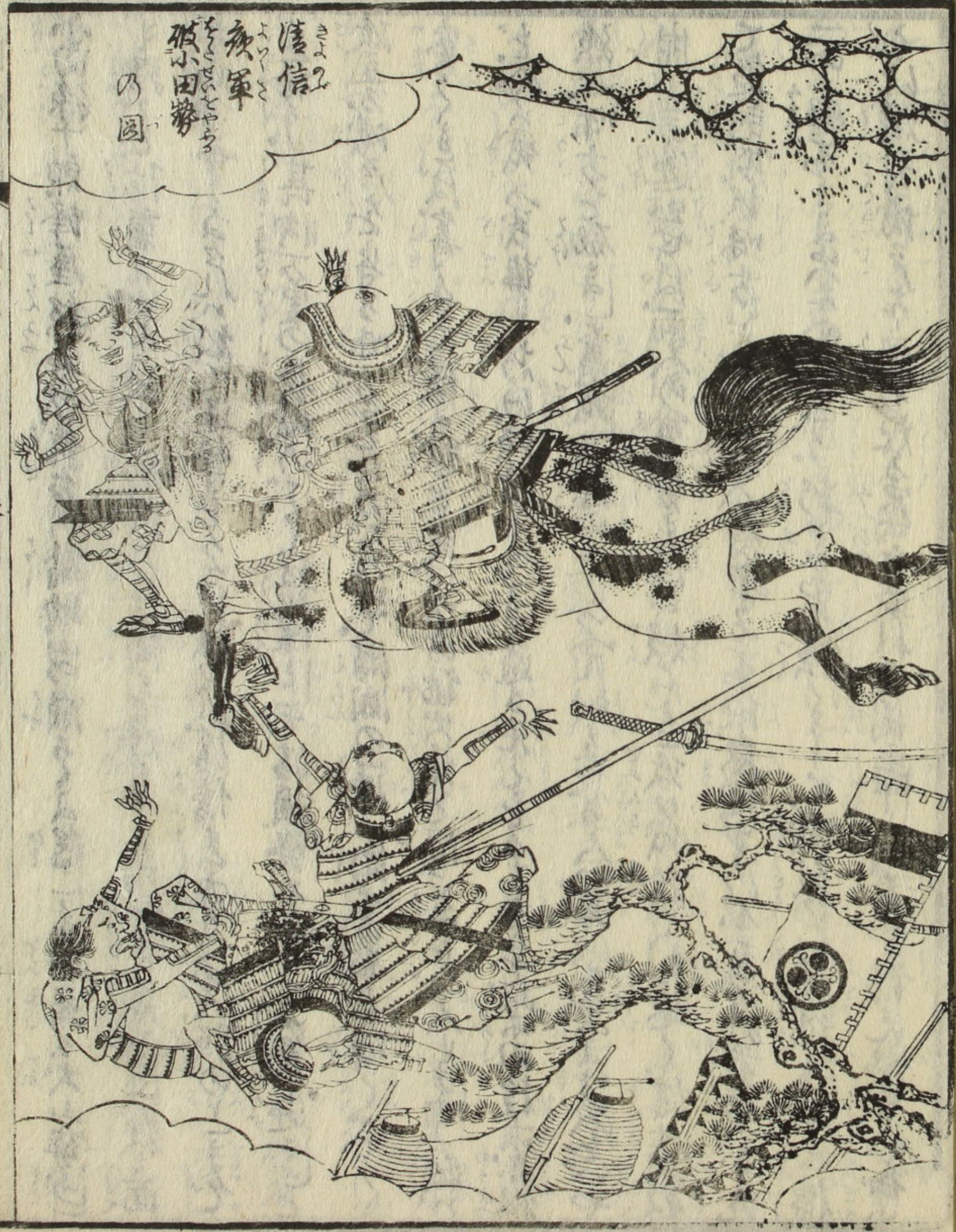
用細間信秀隱大山壘條

荊山の宝璞豊城の靈剣晦藏年久しとて尤皆能く射あり加茂家
たる名家一とび民間に埋してより後既又年あり信信懐と震ひ後
忽信氏より出く後家より授けをうけ終に加茂因幡守に捕せらる大山の
城代とせらるにむえ尾張の地より本城福系山は外に遠く隔る
秋城信頼とい其間甚近くまのまの信小田母後家より合戦の事とて
後小田家より大山の城を説ひ奪んと戦後度より及ぶとて尤信信の武勇
強く是より寄るを退破り既又十一年其間一度も石見の名城に
其武勇もや懼とらんれともり道三戦功を感賞せらる五百貫
をぞ賜りたるは又天文十六年霜月より信信凡邪身に入御りて
のりはありはり又熱回日とて強く月十日にありては後熱回が如く

の上より系糸れ朋丸をて際しく懐い味方の周章とる所制く人々
敵を知らしむるまじき。其の星を登りて親信の峰をよみ。狼煙燧くま見
ゆるぞやう。其の國の長安工を始りて。曉方をよみ。諸方より援兵とを
よみ。其のいご防ん。何系難き。のれあさき。と。車よ。擣よ。致し。城井
を。見。わ。け。ぬ。敵。を。や。腹。の。よ。と。攻。詰。す。信。信。再。び。味。方。を。看。み。ぬ。我
勢。七。百。八。十。人。防。敵。は。不。足。也。三。百。人。の。擣。よ。在。て。鉄。炮。を。連。べ。て。後。堪。よ
系。出。り。敵。人。と。思。入。者。馬。は。皆。具。物。具。は。け。用。ま。り。我。は。あ。さ。よ。
敵。を。遠。く。追。出。し。候。は。候。は。し。と。諸。軍。甲。冑。と。固。る。中。も。他。は。ひ。り。く。矢。炮
兩。番。敵。と。打。出。さ。せ。擣。よ。う。砲。り。て。城。戸。を。用。さ。致。し。下。へ。去。還。を。に。し。又
突。て。入。自。ら。三。間。柄。の。長。槍。と。引。拵。面。は。向。入。者。六。七。人。水。は。た。ま。り。は。突。病
世。に。威。風。凜。々。たる。勢。ひ。は。恐。と。二。日。は。崩。と。三。町。口。を。別。と。赤。木。と。燃。ん。て。放
敵。せ。り。續。て。系。出。り。城。中。の。軍。勢。は。百。余。騎。へ。し。し。令。鉄。の。良。後。と。也。

信信が敵を齋粉と碎くを飲ひ心を放つて追討せり。信領の奇兵
三百騎は遙く後をうて西へ巡り。圍地よきて何れも城兵もよきて
突出とる所見らる。叔謀略國よ當り速に城中へ入る事と。案
田槍六糸松孫七水城助十郎。旋風地より起り。城戸際を攻り
虎口を破り。近入りと槍先並べり。合する城中に守兵三百八十人け
味方をし。不意に美へ。先づ構より。我れ。何れ。あ。ま。二。合。入。り。こ
長安を。親。信。福。系。又。常。門。卷。村。源。六。二。記。旗。よ。如。て。快。戦。し。信。信。の。よ。て
還。り。を。結。ぶ。る。け。信。信。源。次。の。け。後。より。れ。大。病。を。積。勢。燃。る。が。く。
瘦。れ。喘。息。將。く。味。方。を。圍。り。馬。を。と。り。て。ま。り。不。凡。咽。喊。地。を。塵。に。城。門。の。敵。の
形。を。見。ん。と。し。れ。が。を。敵。の。逆。中。し。心。悟。し。と。思。ひ。し。青。兵。を。用。ひ。入。り。手。派
こ。さん。を。れ。を。来。て。て。城。を。圍。り。奸。兵。を。廢。せ。せ。よ。入。り。と。所。は。と。て。引。入。り。せ。ば
信。領。方。の。正。兵。と。一。夜。守。り。加。後。因。幡。身。を。討。奪。と。想。く。と。噂。ひ。傳。り。

信
長
の
軍
旗
の
圖



吉正日記篇卷三

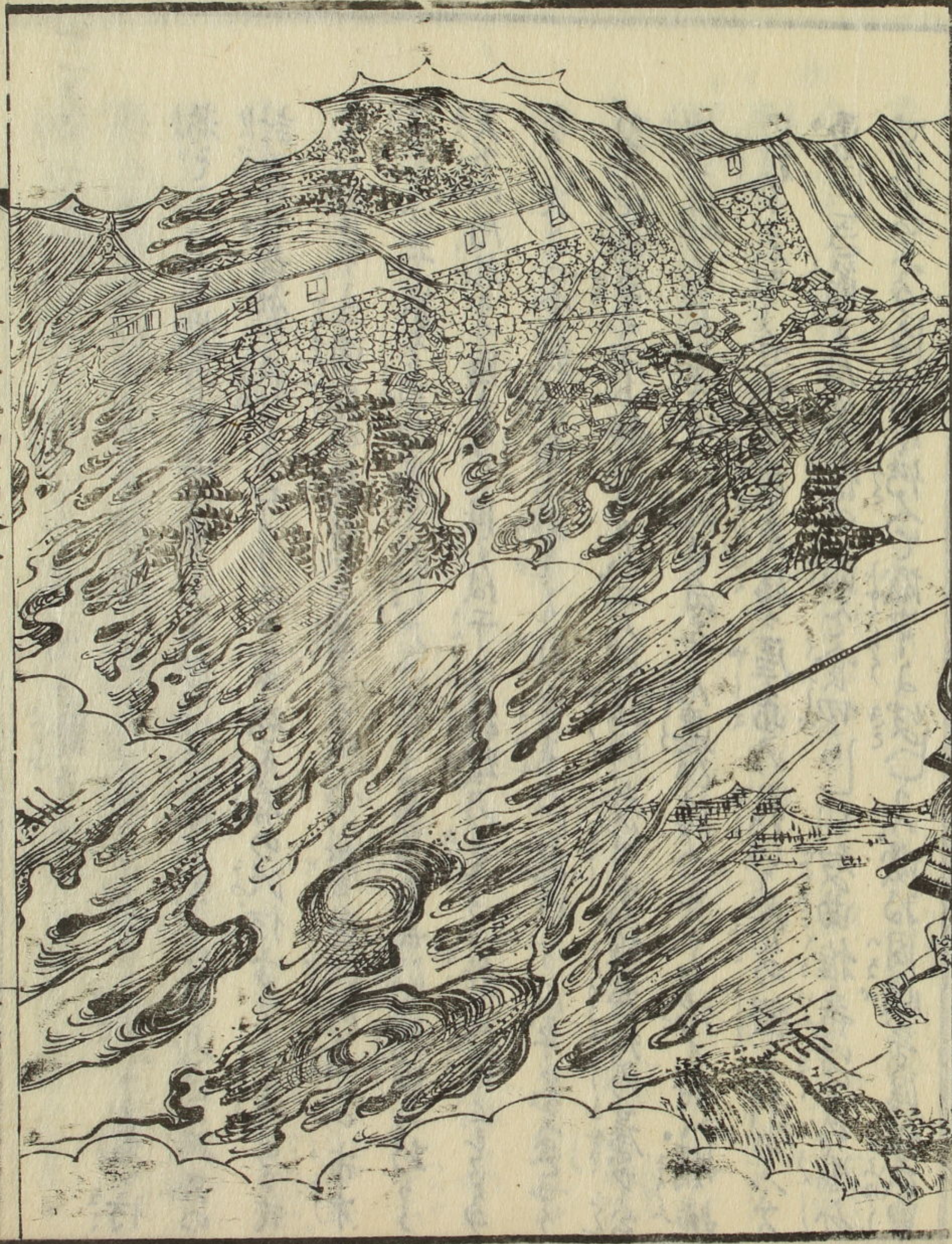
十四



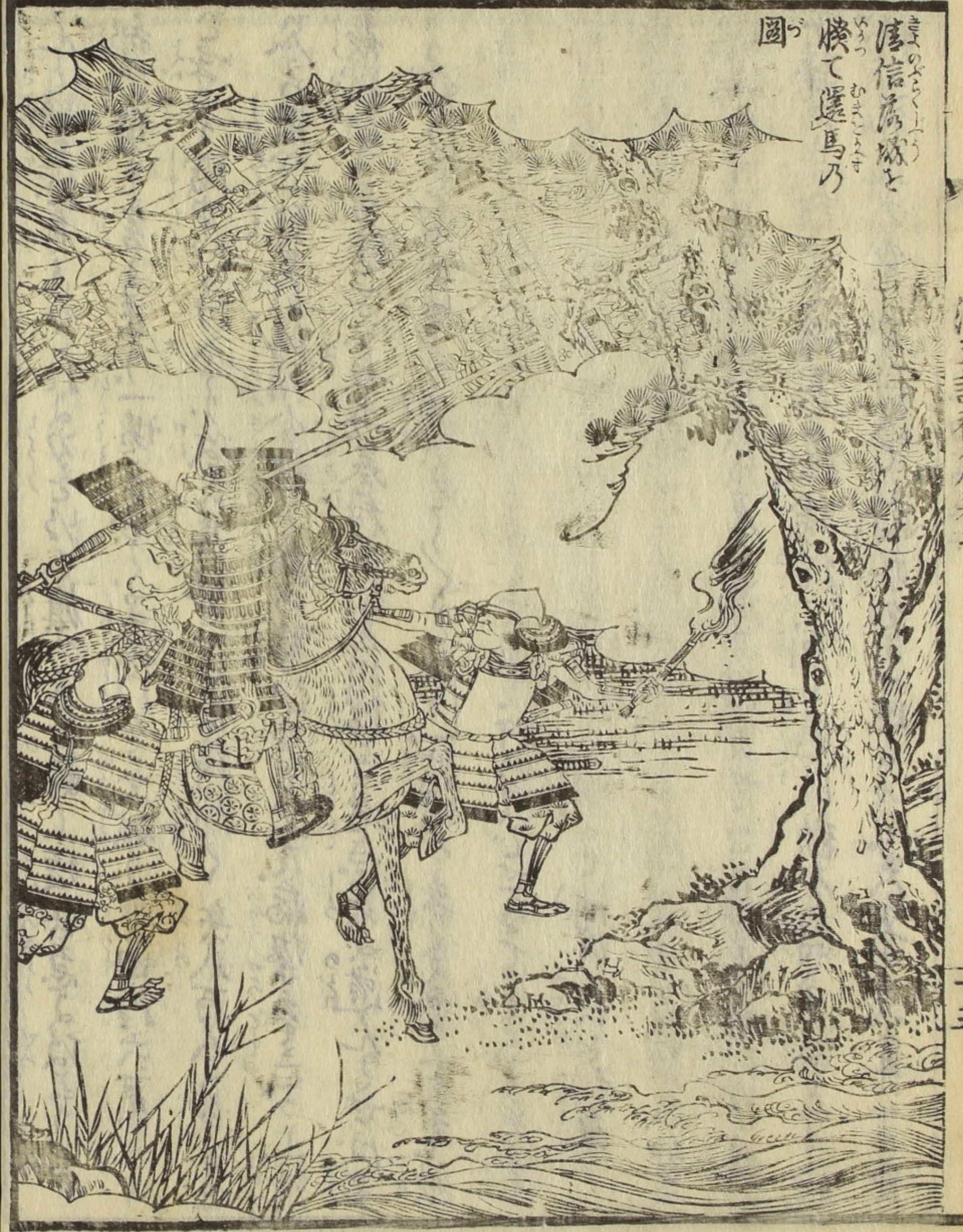
十三

小由孫十郎峰屋敷長谷川橋助山の崩るより遠く大山勢也
と獲て防禦を放らぬ横の防衛を焼くは猛虎の如し然る面
を向て中より丸を放て追撃するも殊に信長丸も体入殿のよきを
とめり其状万里の長城の如く堅固にして信長勢を中より遠く
攻むる城戸を穿る味方其力を以て波瀾の岸より衝て出敵を碎くごとく
突くもば寄る前後も敵を交に方の猛火格と隔て兵二人も来り戦
ど今我へ我勢もかけ返すとより遠くを刃を柴田控六番松
孫七味方と勵まし奮戦して堪ゆるも大列きたる人心耳にも交り
崩れに逃出せば西人の英勇も後には攻められ引退く信長放
て追討せし味方と率し線入んとするも忽ち城中に公多り北若
二の廓も又火をのけしうおれぬ強くして城段の紅火風も吹く橋
くに焼付城戸を固めたる軍兵これ又固障火をや防人敵とや標

んと發する寄るもいれん力を以て旗のものと騙し獲兵急よ攻より
都の勢も安んずる一塊もあぐり城門を京破り柴田控六番松
と争り城中にけり入り攻むる其勢も余騎防ぐ兵八百人も是も
今も無心一致せし信長令儀と断の勢ひもとつた病勢をさうして
獲我ひも勇にうら長兵巻村より川増と退き突も遠くとせば安
るべかりしを川も線も固をさうくとすは「我城を穿るる千丁年敵
に腹を配るれども今日城戸を奪もさうぐり竹の真むせめて自ら見
らるべき我れ信長向ふべき御前を来せりと僅も七騎の兵を引
再び城戸にたてし信長方の軍勢城外も見届る中も切て入加
園橋守信信が討死するも見て語り傳へせよと當ると幸に切て
七騎の兵討して後其身一騎に歩も退り敵を討り殺すに
後も乱軍の中よりけりて討死を遂ぐる天文十六年丁酉



信濃城を
懐て還馬乃
圖



十二月十二日死年九十歳いまだ情じき齡なり

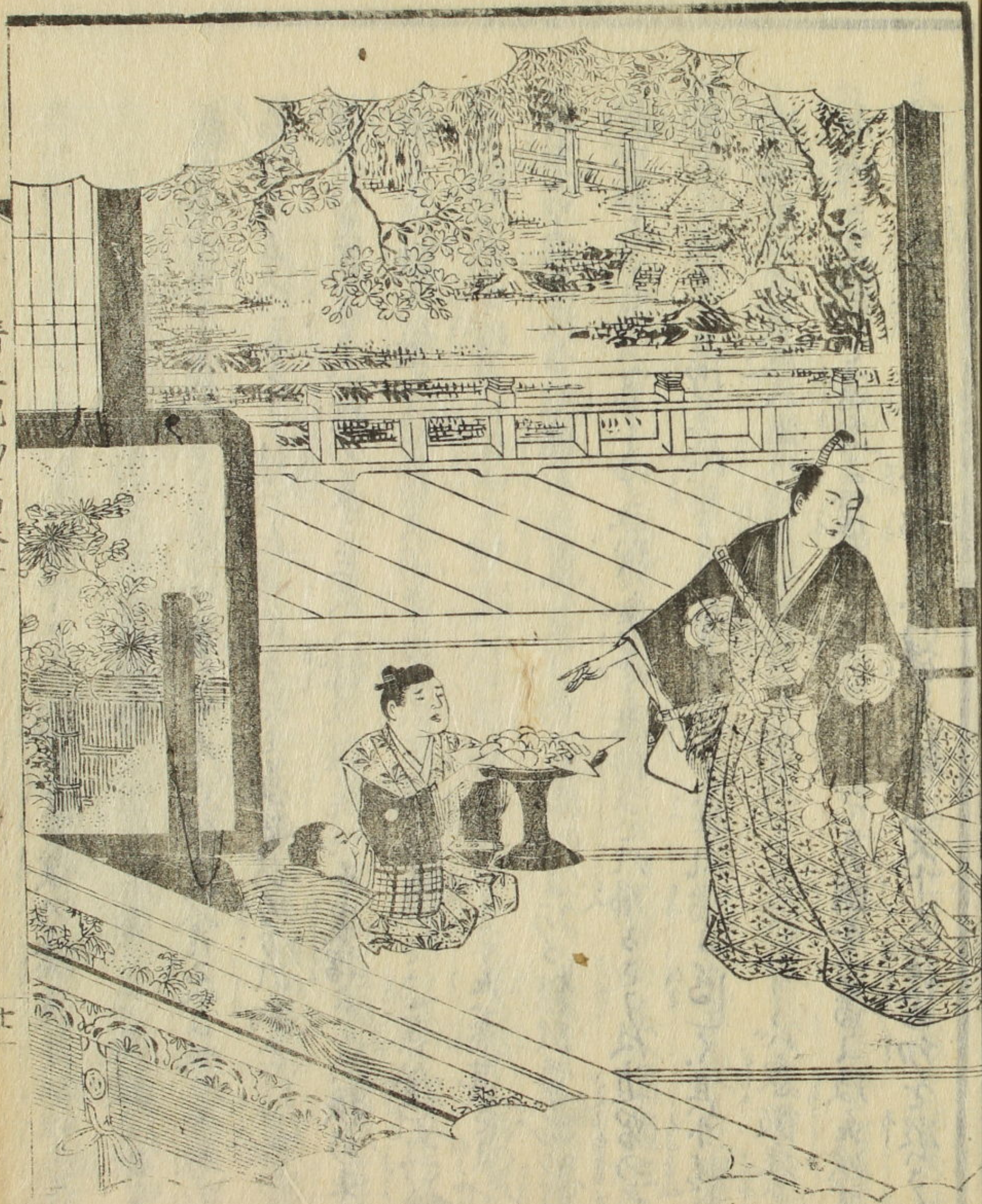
傳よ云け日六山の城より出た後、敵の内應して、城を墜入する者を行
若ぞといふ。此の市山の市といふ琵琶法師が在る。此の好兵の
計畧之其夜を窺ふ。是より二ヶ年以前、春の以行方より来る。大
なり。脊中より面鏡の琵琶を肩する。西人の警若法師、大山の市中
よまなり。平家と視い家、此門戸より来る。其以の戦國乃ち
天下の内乱する。困りて、目よりは于、五狼煙の光より外、又、観とる。其
たぐ耳より、金鼓、都角の響より外、余もは、此、し、は、平家と云ふ
の、に、民、愛、よ、ぶ、知、ら、ざ、る、ふ、二人の法師、可也。維盛、御の、簾、中、公
達を都として、西海の波より身をた遷ひ、此、ふ、な、と、語、り、付、ハ、婿、婦
の、後、を、去、り、せ、水、尾、屋、系、流、が、屋、並、の、戦、い、ハ、無、の、繼、を、引、あ、へ、る
勇、に、し、き、節、ハ、高、傑、の、齒、を、食、切、ら、し、む。夜、曲、雅、音、の、感、を
せ、ば、と、い、ふ、は、し、げ、は、傳、へ、て、城、中、は、は、じ、ら、ぶ。城、守、は、信、長、勇

の、り、儀、香山の、ま、の、ま、の、ま、を、枝、わ、て、源、き、ハ、入、斯、る、風、流、の、乃、に、し、心、を、よ、せ
た、ふ、ぞ、う、や、竹、圃、の、者、よ、し、せ、よ、目、人、と、云、う、ハ、竹、の、苦、し、く、人、を、逢、て、一、曲
奏、せ、せ、ん、の、を、と、於、て、城、中、へ、呼、ぶ、也。其、音、圃、竹、の、不、之、や、同、々、ふ、某、た、ハ
先、牙、を、肥、系、圃、凍、ま、ら、ふ、不、の、春、之、先、を、柴、の、市、牙、を、山、の、市、と、云、い、う、な
る、を、此、業、圃、ハ、也、思、牙、と、も、如、き、時、より、音、人、と、云、う、ハ、父、母、ハ、是、の、時、に、弱、法
師、の、牙、ハ、煙、を、ま、る、俣、り、く、殊、ハ、行、く、ち、う、ぬ、行、輪、車、世、より、と、ら、ふ、と、い、
い、う、り、は、權、へ、き、と、案、じ、は、い、は、し、不、ハ、日、圃、の、住、人、柴、山、檢、校、と、い、ふ、目、人、あり、世、に
性、源、き、ん、と、已、先、牙、を、購、へ、給、ハ、眼、聘、と、い、ハ、我、も、人、と、答、し、き、物、ぞ、し、平、家
と、い、ふ、曲、を、教、へ、る、と、い、ふ、も、是、の、時、に、は、い、は、し、を、去、り、後、の、業、ハ、は、ぬ、り、り、と、十、余、年
の、年、月、を、内、よ、ま、ら、し、は、秘、す、は、傳、へ、と、悉、く、傳、へ、ら、し、其、後、彼、の、年、積、
今、年、六月、よ、東、都、座、改、の、時、と、い、ふ、り、逢、ん、と、い、ふ、遠、く、と、都、よ、の、り、圃、
より、より、た、ち、教、ま、し、目、人、法師、の、中、に、く、平、家、を、逢、り、し、ハ、獄、官、の
称、是、は、然、り、於、て、市、と、い、ふ、名、を、免、し、は、し、より、師、匠、柴、山、檢、校、の、厚、恩、を

依之同年八月去彼大膳を美敷藤平國に還使せらる。道三揖比谷と云
 地は新に城を築きて、安らざる。是偏に小田の五三は依之。和膳等て
 後信秀より大山の城を奪ひて置く。道三の屋より大垣の
 城は其後の地は在て還て今信秀方持城と云。大山尾張の地に有り。
 自北に後藤藤原山持城と云。以来又多しを引の基と云。人といふ
 方より大山の城の代は大垣を賜きて置く。信秀早速承引はしく。大垣
 の城をあげ。九月十一日道三信秀。膳川の南に於て互に對面あり。
 祝言文を走らす。其神甚厳重。是より兩國互に治り。皆年々斗
 ひ。中勢を捕秀政の武勇の。九年吾人の新風流を。好む。其の美濃方
 此老土堀田を。方へ和議の。訓ひ。書を。送る。其奥に
 社ひら。せ。修。ひ。し。み。れ。凍。も。る。を。春。め。川。々。乃。風。や。く。く。ら。ん
 と。古。歌。を。傳。へ。送。り。く。る。同。年。又。中。勢。を。捕。り。大。持。り。て。道。三。入。る。の。息。女。乙。姫。

つを小田の嫡男と総に信長の室に結婚あり。同年此を婚姻の儀式ありと
 兩國の人。民。い。よ。く。平。手。が。成。功。を。ぞ。感。動。ト。ス。

傳云信長は天文三年に出生はしく。今年十八歳。幼名吉法師と稱し。
 其機え事ありて小田に拘り。大膳不款より軍方馬の中と。り。物。の。殺
 り。し。た。り。此。幼。稚。の。時。より。武。藝。を。好。む。を。市。川。五。郎。と。學。び。劍。平
 田三佐方と。り。若。を。師。と。し。又。業。者。の。身。の。煙。き。り。の。往。者。の。義。經。と。し
 方。に。屋。と。し。又。尺。の。扇。を。立。せ。其。上。を。踊。紙。給。り。又。脚。尾。一。尺。斗。り。是。は
 初。め。と。し。又。右。後。の。川。に。於。て。毎。年。三。月。より。九。月。と。水。持。ひ。と。名。付。て。ま。る
 水。持。試。み。に。今。の。自。在。を。な。す。彼。秀。又。躍。り。水。危。と。踏。り。竹。柏。水
 流。り。目。に。驚。る。は。斗。り。又。櫻。田。の。海。と。し。船。持。び。と。唱。へ。ま。い。船。軍。と。操。練。し
 逐。龍。攻。撃。す。り。て。自。治。し。給。り。此。より。今。未。曾。有。の。良。治。あり。
 就。は。天文十八年三月。彼。後。守。信。秀。朝。長。腹。痛。れ。病。に。罹。り。初。年。に。十
 二。歳。と。七。年。法。給。り。信。長。は。十二。歳。と。て。父。の。嗣。で。清。原。末。盛。等。の。城。と。



信長偲て
 異凡
 放蕩
 の



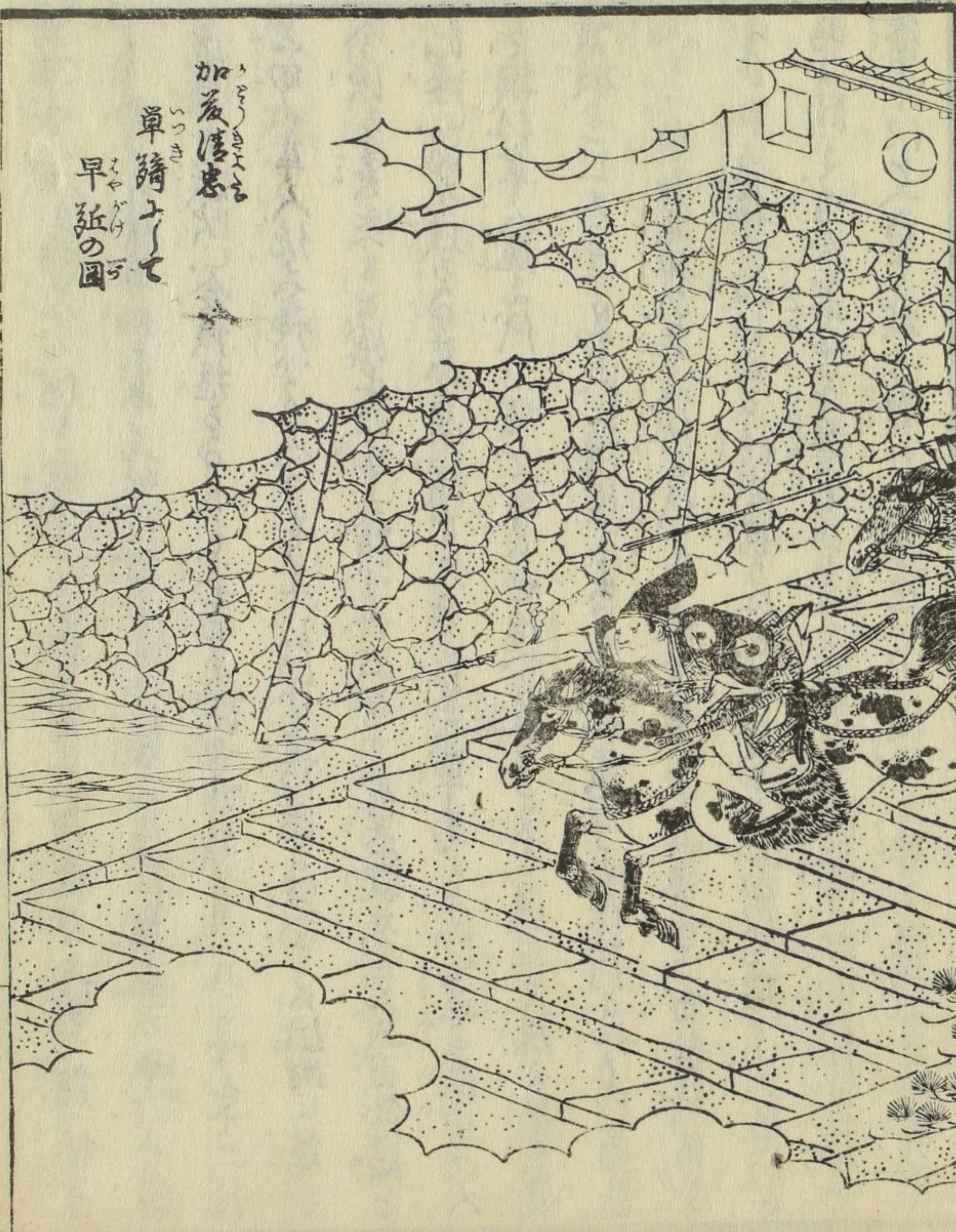
治の終ふに付天下其を打つるごとくに乱と事。高傑の諸侯並に破らるる
武田今川西より後頼義を首の陣勢を非ず。小島より尾張の隈を
難くも虚を親ひ実を際し。一言よん計とつた。又も物も思ひ
家督をまら。百とく。瀧の向異風を好む。長管のち力。此柄の三子。徳の森
繩を巻く。巻く。小籠の長と三尺。餘。輕尻地を曳摺より。鉄の車と
掛て。さし。掛。髪をば。崩。黄の平紐をひて。纏。ま。その。さ。茶。管。れ。く。み
し。腰。は。糸。冷。の。瓢。茶。七。八。虎。は。の。火。燈。袋。さ。く。も。よ。元。著。其。こ。ま。何。よ
磯。て。つ。へ。き。換。る。く。城。外。村。津。し。り。附。り。居。居。り。つ。る。飯。取。菓。物。の。類。と
求。ひ。馬。上。つ。て。喰。む。ぐ。ゆ。き。或。い。舊。軍。旗。持。ま。り。此。陣。さ。り。は。近。習。の。肩。よ
無。う。て。城。中。に。帰。り。外。同。より。見。る。附。り。合。く。虚。元。者。は。信。く。其。下。懐。け。け
は。隣。國。は。自。れ。大。國。に。諸。侯。多。く。懼。り。て。魏。多。い。ま。る。り。の。ち。ろ。く。忽。徹。兼。よ
打。碎。き。武。威。を。遠。近。に。震。ひ。其。勢。ひ。は。際。して。其。國。を。一。番。よ。改。え。決。せ。よ
隣。國。を。養。食。し。終。り。帝。都。に。義。旗。を。翻。し。天下。大。一。統。の。功。を。成。り。んと

大谷内は休むたるを知る人。又も。う。り。し。と。故。も。老。居。平。手。中。務。を。頼。秀。政
ま。ご。い。を。誅。め。り。の。誅。書。を。張。り。て。切。腹。さ。る。小。ぞ。お。ま。り。魯。仲。何。將。持
よ。出。期。は。は。は。思。ひ。出。さ。し。嗚。呼。中。務。を。捕。ま。し。し。聰。明。忠。義。の。士。な。り。し。が
我。が。心。を。ま。り。ぶ。る。の。の。小。量。と。よ。貴。水。の。り。に。雲。何。い。は。毛。を。受。よ。と。水。を
手。向。給。へ。り。殺。同。な。り。と。や。斯。し。し。う。月。年。此。に。月。男。我。者。入。道。道。三。よ
英。傑。團。富。田。の。心。徳。有。と。見。奉。る。附。り。風。流。日。以。より。其。く。柳。の。巻。ま
改。腰。の。抱。物。の。秋。の。穉。田。は。登。籠。鳴。ま。れ。く。に。勃。着。せ。虎。の。皮。と。豹。の。皮。に
つ。替。り。に。纏。ま。る。才。務。を。名。に。大。天。の。馬。は。長。風。乃。信。具。して。お。寄。り。号。槍
持。向。の。若。も。ま。と。悉。く。異。を。産。し。防。中。に。遷。り。其。外。壯。同。を。奪。り。斗。え
道。三。月。行。列。の。換。え。ん。ん。と。所。茶。の。氏。家。に。入。居。び。て。何。の。居。ら。ま。け。れ。よ
忽。其。家。に。彩。糸。の。馬。を。ま。家。内。を。恥。と。見。返。天地。も。驚。く。斗。大。笑。を。ぞ。せ。り
と。多。路。後。近。居。の。軍。曾。て。ま。心。を。識。ら。び。と。た。自。然。と。道。三。の。け。ま。た
在。り。を。知。り。と。多。と。道。三。の。月。は。心。膽。を。滅。た。と。が。く。直。日。路。と。う

先達て寺中に三掃りぬ其後信長は徳寺に入給ふ又坂田を度猪又
兵女山門(出迎)寄宿の寺に案内し多し皆御家より休息ありま
皆く在て道三對面致し「方丈へせ給へ 兩士再び案内し出奉る行
の向は改め給ひせん宿條の大段の袍は月色の白くをりて右馬負真の
如き其様甚れ自らして信長は初装は事多し又別の人は對
らざりし心は諸士をを見て驚き恐るるは「徐くして静
歩く寄殿極道の侍を遣り給ひ山城を道三は旗柳の裏に
居るこの指渡しとて出て對面せらるるに信長は「月の中は影
淡くして影をばは」給りて坂田を度猪より進み出給ふこと屋敷道三
へ道殿とていとヤクバに大きき聲きたるをば「おん心はゆるぎ
既しけし来奉る侍時流妙の氏家に我を伺ひける侍者の一人をば「教
よく似せ給ひしに侍て其者とぬ」怒怒れを失せり。教の罪を
く流しと附し給ひしに道三は「弥留き聲言はしけしをば「おん心はゆるぎ
百人の見物の中は於て斯一途より見えたる眼力の恐ろし」とよと云度入と
ぞせりとさる其後餐膳を遣し本國へ歸り給ひぬけ日暮後家の侍士
心なき者ハ信長は「是れ風流なる人にて誠は我主人たるに人を驚
え給ふのうめてさよと流し給ふ者もさるる道三は「是をば「我が家
いふれが眼みさるる珠なり人を見るの能いさるるを見よ夫れは「我
家のさよとけ狂人の門着に馬を繫ぐの態」とよと涙をもらくと
流されたることなり

徳川道三信長保身須條

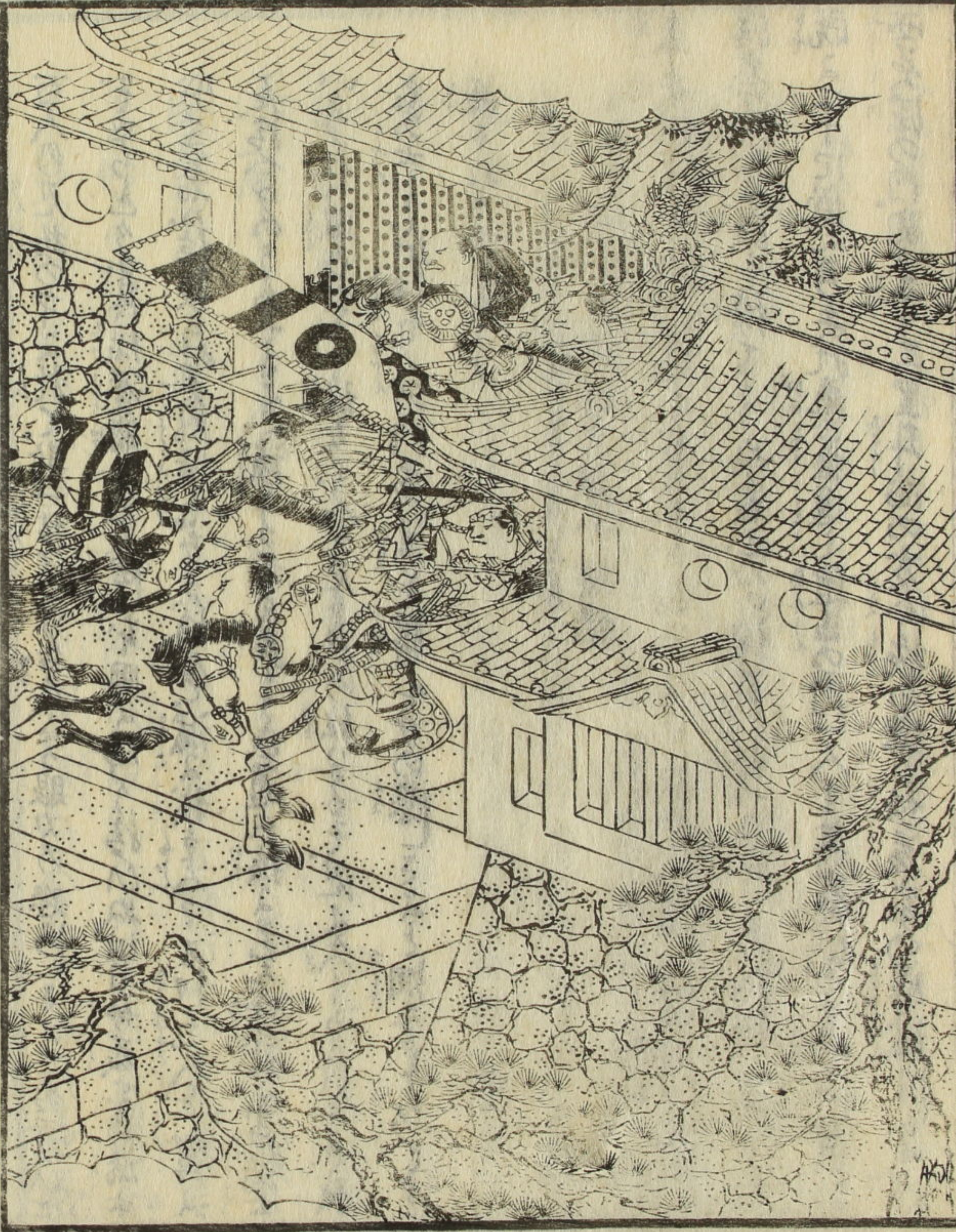
年夫れ予く三や白駒の窓を過るよりし尚速く度は「此門
信忠父の遺蹟を禱せしむ。每夜入る侍臣に侍る。今年弘治二年は
既二十に歳之弓夫れ「益進」道三の内一人も其右にゆる者は「其
西兵隊の内関ヶ原を二里斗西の方今頃の城は「每夜家の屬城は「



加後清忠
 早延の園
 早延の園

清正記力常卷二

十四



清正記力常卷三

十五

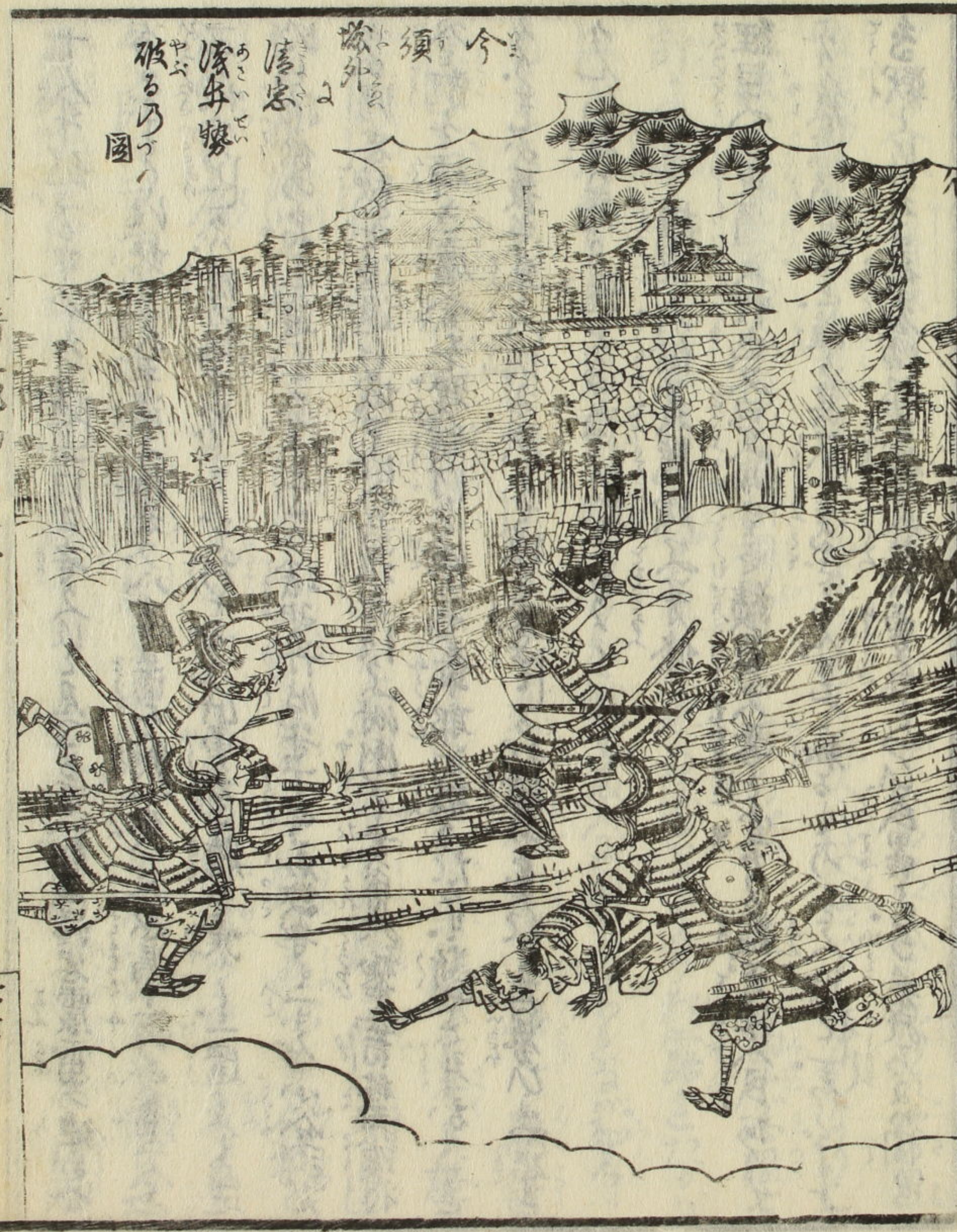
の舎才長舟集人仇を城代して置とる。け地近にと堰を難(橋系)
 より西に渡舟橋系舟久政の領に於て勅より久政軍勢を遣(今頃)
 道遠を放火(合戦終るより)。を西兵渡烟喉の地より。我(今)辛二月
 上旬舟集人仇大痛にうづを是(け)けは道に圍は(け)けけ耐(え)耐(え)
 今頃を去るへ(と)渡舟(勇士)丹波守(丁)時若狭守(三)又(百)餘騎と
 引陣(城)を攻るの甚急(城)中大(き)小(警)急(早)馬(を)遣(速)く(武)勇(の)人
 を撰(び)集(め)人仇(又)代(て)城(を)守(ら)せ給(ふ)と告(げ)る。道(三)里(殊)々(難)き(咽)
 喉(破)ま(二)大(の)と(ぬ)ば(一)誰(渠)と(云)らん(か)加(反)彈(正)虎(居)門(如)の(い)あ(じ)
 汝(ま)の(款)を(追)拂(ひ)集(め)人仇(又)代(て)城(を)守(と)其(勢)を(二)百(餘)騎(皆)屋
 敷(の)兵(を)撰(て)授(け)らる。清(忠)畏(り)いと。其(座)を(立)ち(ぬ)け(帰)り(城)門(か
 馬(又)跨(り)唯(今)君(命)を(辱)か(ふ)と(る)上(い)毛(より)今(頃)又(折)向(ひ)渡(舟)橋(と
 兼(登)り(に)と(き)ぞ。我(又)屬(ら)る。味(方)れ(人)々。関(川)を(遣)り(て)獲(れ)る。物(具)と(も

かけ(敵)を(よ)て(証)出(る)其(を)換(替)せり。昔(楠)正(成)小(條)と(と)と(河)内
 國(又)旗(と)に(天)王(寺)へ(出)陣(せ)ら(せ)耐(須)田(を)橋(二)万(餘)騎(を)押(寄)り(我)れ
 故(ら)に(其)故(今)都(宮)公(綱)が(一)騎(と)て(心)威(を)破(れ)んと(六)波(羅)の(証)出(し)天(王)寺
 (い)ぬ(い)ぬ(か)や(と)え(ん)と(い)ぬ。若(と)思(ひ)出(す)。稱(嘆)せ(ら)る。と(る)と(る)。毛(か)る。よ
 義(勢)を(勅)さ(し)る。二(百)餘(騎)の(兵)士(も)。毛(か)る。と(と)を(清)忠(に)告(る)と。我(邊)小
 馳(向)種(を)も(何)と。関(川) 関系の地あり ま(を)渡(上)後(二)七(里)余(り)と(る)大(末)の(村)又(橋)系
 山(と)出(関)川(を)流(し)懸(り)申(懸)乃(す)之(家)と(好)く(息)と(休)め(今)頃(方)と(折)寄
 り。其(間)二(里)斗(け)耐(我)し(美)美(中)と(送)く。致(炮)の(寄)地(と)勅(令)鼓(の)音(山)又
 懸(て)懸(せ)り。清(忠)武(具)を(空)牙(馬)上(に)在(て)大(高)敷(を)あ(け)い。小(面)今(け)勢
 を(看)る。後(陣)未(と)未(く)作(て)猶(く)八(百)は(足)ど(と)る。大(後)陣(の)續(く)と(給)は(後
 又)耐(射)う(つ)は(し)其(間)城(を)落(さ)し(ぬ)早(延)したる。毛(か)る。業(之)勅(致)其(一)人(なり
 大(款)陣(を)証(入)死(を)二(敵)の(下)に(試)して(人)を(我)又(同)意(何)か(け)徵(勢)を(以)て(突)入

諸軍勢を以て行々留くも務めざることを曰く。乃ち頼義源六美先
 進も、我は兵糧を以てを駈と云。清忠既を以て留くを以て其間に討法
 後と頼信が裏沙張耳陳餘が脊水の陣立てる必死とて却て勝利と
 る。此の先敵陣を破て後城中に入心よく兵糧を用也。若し討
 死せし今日頼義山と食世が我等がみの末期の水をや。腰は兵糧と
 へり人何んがを捨て必死とせよ。首をえり腰がうも馬は討を各
 名がうを敵を破る討死とる死の二つありと。威義凛々としたる采
 配。誰う命を惜ぎん一瞬の向う今頃。証討小る地又打より。城
 中城外をえりおせ。碓氷丹波守。丁地若狭守。一手より城をえり圍
 岩山の郊外のごく。今に城を巻取んと探立る。城中に軍勢を必死と
 して防禦あり。眼をの明とら。敵は是を堪えざる。近に勢の倍
 たる山中。倉穀あり。突て入其飛弾丸をえり。飯の谷は板る。其
 中

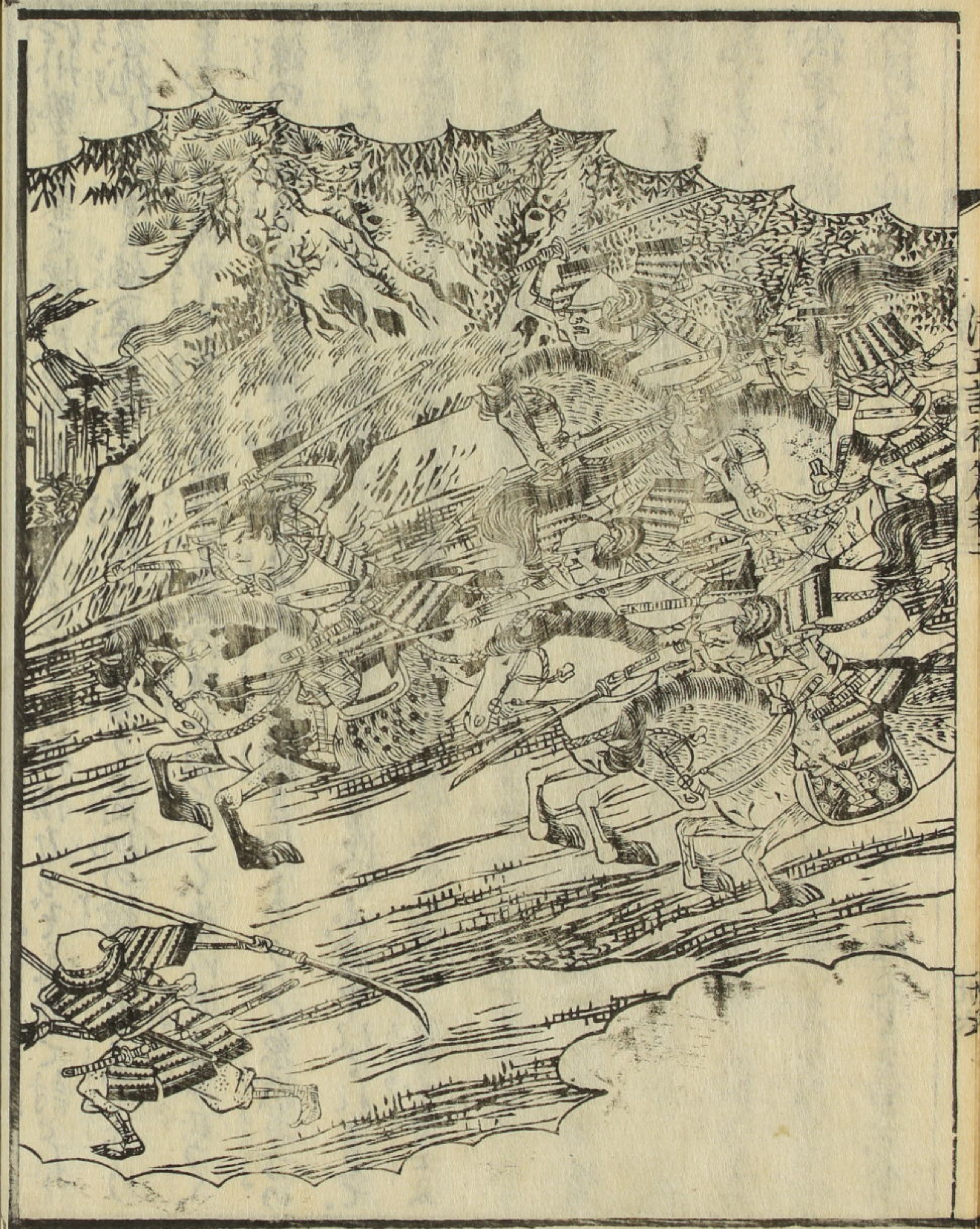
州勢を兼て略したる。我は備へ道三が後浩ちる。乃ち籠て討とれ
 忽死し三隊は後嘆き叫んで。我は清忠自ら三間柄の槍をえり。馬より
 走りくと。打振中と率い突墜し。吾人の境を以て。若し逃る軍兵あり
 一條の血流自ら用け。槍先を射入者。遂に倒れ。乃ち急流舟方の
 勢を以て。突破らんと。惣軍をえり。乃ち城の中に。乃ち近入
 警政後浩の事あり。乃ち内へ出て。審みと内外を探立よ。城中に在る勇士
 乃ち本治丸湯門。小巻源を城門を用き。其文字を乗出。手先を也。突巡る
 又寄る。旗の手あり。けに。夜語に。乃ち何と追く。馳ける。後浩勢
 清忠が力戦と。乃ち後浩をえり。乃ち後代との名あり。乃ち思ひく。乃ち近入
 死せる。乃ち我は。乃ち敵兵今に大崩し。乃ち潮乃湯。乃ち異なり。乃ち丁地若
 狭守。懐懐して。味方を助く。後勢の。乃ち後を見せ。懐病の名を。乃ち行
 の。乃ち彼ゆる。乃ち命を。乃ち呼ぶ。乃ち名。乃ち重。乃ち命を。乃ち睡ん。乃ち勇。乃ち又。乃ち六

今須外
清忠
浪舟勢
破る乃
國



吉正記幼童卷三

七



吉正記幼童卷三

八

十人半死する中かきて返二日守之候と見入る所へ加藤清忠震雷の地おか
 多るがごとくに怒り去平治は証あり八方一面を削突て入忽馬上の去高と云
 一貴に突止ふ槍の柄中かどうぞおれてぞうけ勇力も膽を寒く一還りも還
 びと相原の宿を造りて逃りて去り後丹波守丁神若殿守とまづいふに
 々々清忠款を退退け城の中へ兵糧をばしつ附ゆき其後丹波守清忠
 令龍を降き廬舎を焼討つを後りて章耶と破つたり斯やと斗ふに
 々々その長舟舟人仇み受て城を守りつらば後丹波守に其勢ひも忠
 々々山後いまり犯とすのさうり」となり

攘夷天倫義龍張父牙條

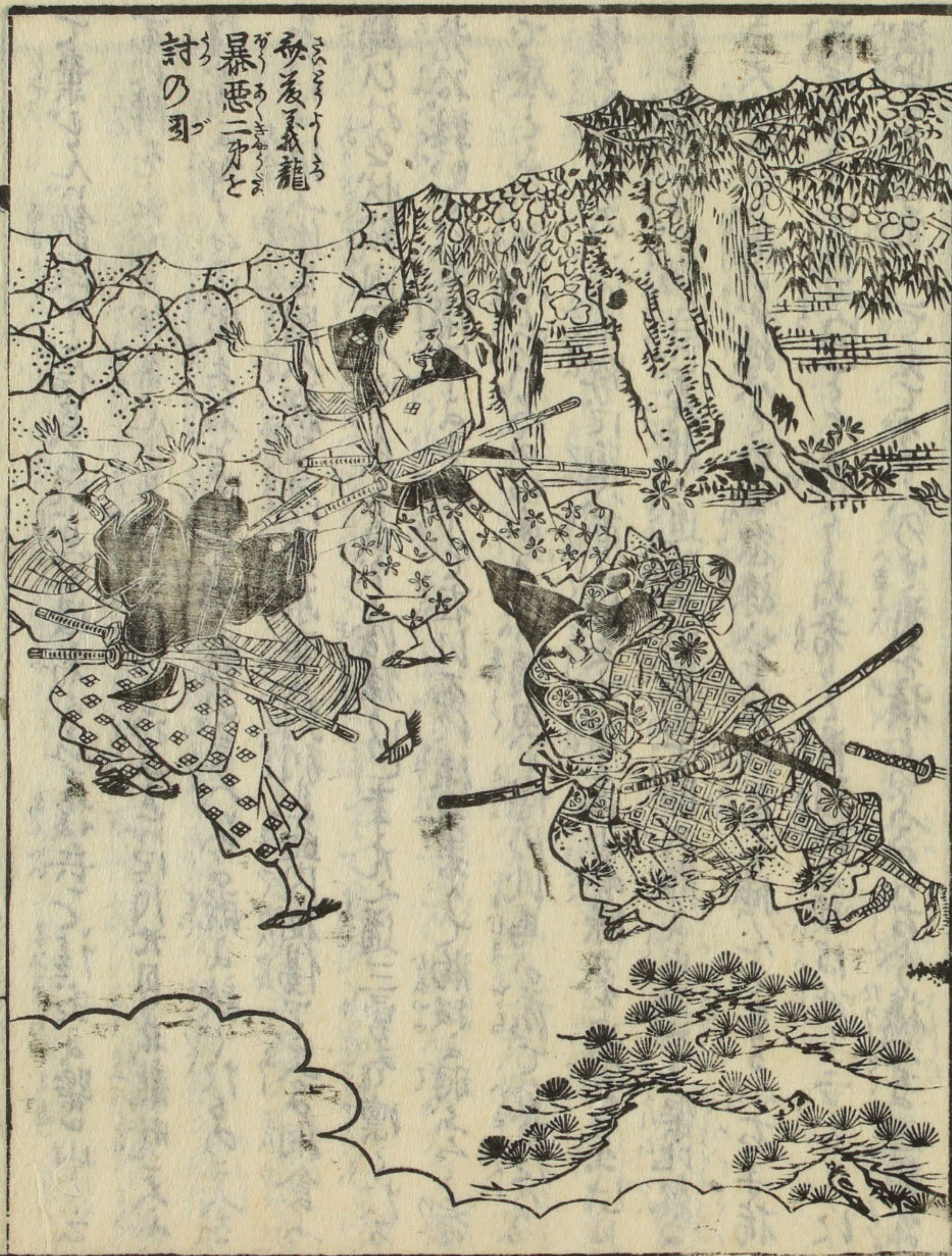
經曰父子之道天性也又曰父母生之績莫大焉と宜かる哉天地人民何んて
 父子後孝道著と誰う其父をさるらん是を知るも乃を人倫と云ふ
 多歎といふは後治部と浦義龍の勇気といふ民器と云ふ義丹乃の國

どつた天は得狼皮はく又又射して不孝と入る者も心は軟つて次の男
 雅樂助龍重日と盜物龍定これ義龍の父ははば括めて孝のなりし
 久保く寵達ある人か内を撰び國務をい懐らばやと懐はら端も心根と
 計ふまはばに年月を送られたる後限もなるより程露きたるい
 けしと義龍も父か心の裏も物あるを憐れあふと國と地らまらぬ
 毛よりスあつるのありに行はして二弟を失ひ國柄を掌は極んと腹計
 て少しと面は然らば純は弘治元年秋九月は日國舊幕の城を守る
 遊園防守城を致るのを降く多ふと道三嫡子義龍は冷し守ら
 ぬ義龍後には松を坊する款ひをばし於て舊幕を破き悲びく又人殺と
 語ひ父を廢して自らせんとも企て入る斯る内計あるのを後より
 去るは日二年に月十九日龍重龍定あ人をひてか城の留守と護らせ
 義丹の死に死すにわづらひしに兼日又其父ははば日未達は日志

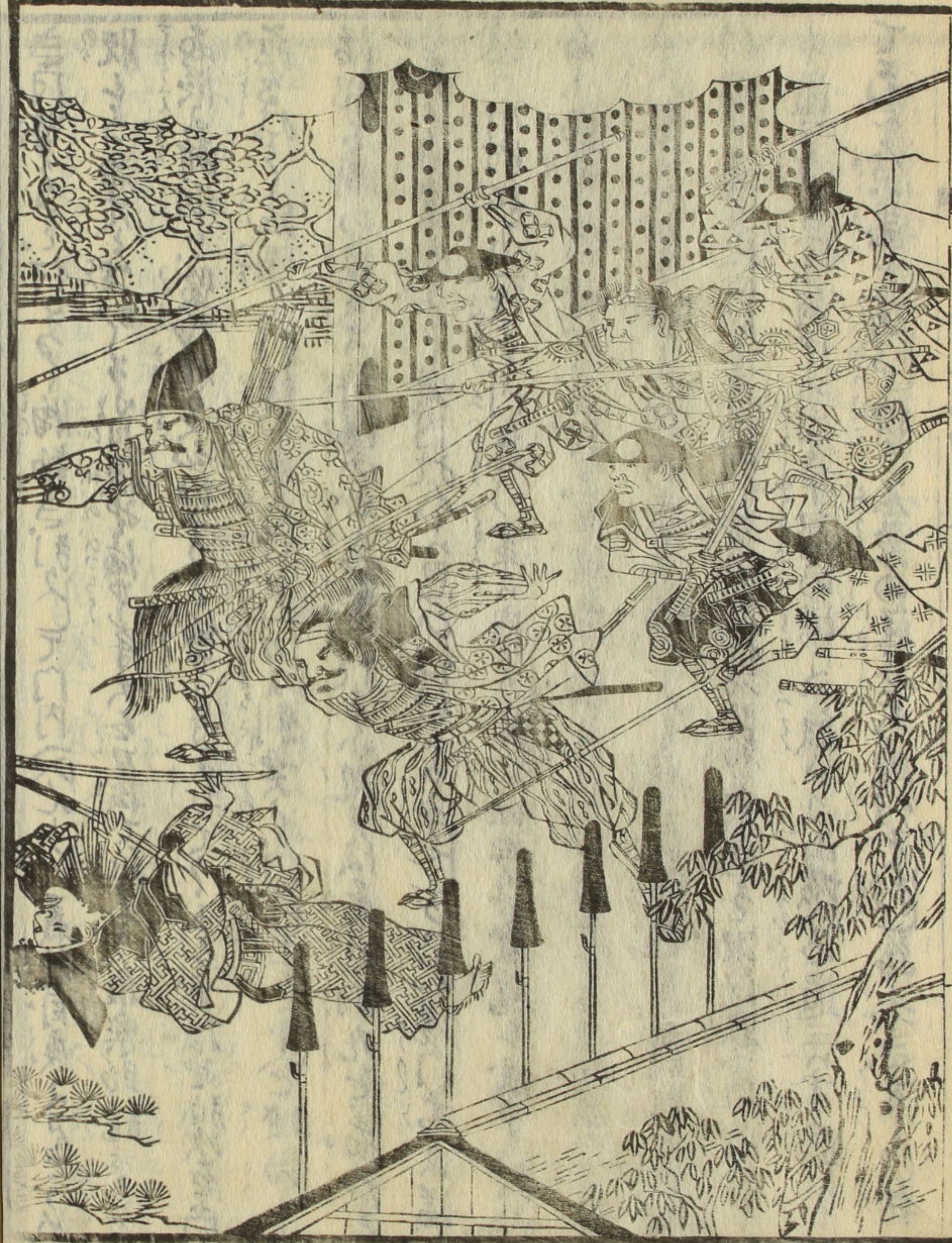
長兵助右衛門二階重出雲守遠山殿助其乃の稲葉山に在る
 治部を浦の方如く仕内應せり。義龍悦喜斜す。以附ておぼ
 け圓と外とをくは。日根理後守門弥治右衛門足才力のかえとえり
 峰若うんが謀計を授けて左右に引つと各幕弓將筒を拵せ。將場の壯
 ひ嚴重に調へ稲葉山に出来り。案内てませさる。入る殿うは今日將倉の
 借し。よは義龍の法知りせば。とつ大推て押供の糸上せり。未出馬し
 結らば。申すに。お中と人と大換え。入る。両身曾て奸計の多きを信ぜど。
 又の義龍出させ給ひぬ。只今の唯願は急せ給り。二三里の内は追付給り
 近し。道留れ士とてませさる。小兼て義龍は。合せぬ。軍一日に言と
 掃へ。人信り。信り。及日。以物終。終り。義龍君へ。腹悪く思ひ。人計
 かし。是の由。御言ひて。伏せり。や。や。や。龍重龍定。実を。追え。力
 て。出。り。に。義龍。後。者。駭。發。引。け。城。門。近。く。出。来。る。あ。人。れ。ん。是。の。目。理

き月勢ると。何とく胸動き。引して。門内へ。入。り。義龍。同。族。より。と。う。め
 既とる者た。多。く。小。日。根。理。後。守。大。を。刀。拵。て。近。来。り。推。樂。助。龍。重。を
 あ。辰。よ。断。倒。と。監。物。龍。重。の。り。と。城。中。身。を。打。て。くる。を。日。根。理。後。守。門
 飛。多。は。ぐ。近。隔。り。引。組。で。え。て。押。し。只。刀。を。刺。貫。く。門。外。を。下。と。強。動。し。
 治部を浦の良き。將場の。出。立。整。つ。た。ふ。肌。は。若。也。胆。丸。と。信。り。不
 心。を。世。家。る。者。あ。く。城。内。れ。ん。思。ひ。及。け。さ。る。り。に。く。死。傷。門。若。も。満
 塞。り。け。附。私。本。二。階。重。内。應。の。軍。内。より。出。て。切。り。義。龍。を。城。中。引。入
 あり。尚。守。居。の。諸。士。に。且。討。し。且。道。を。て。稲。葉。山。と。ぞ。奪。も。さ。る。阿。雲。一。番
 人。質。廓。輪。を。承。え。諸。士。の。妻。子。老。少。一。人。も。強。さ。ん。な。龍。を。安。に。於。て。勇。猛
 の。者。と。妻。子。に。心。ひ。り。又。附。の。勢。ひ。は。就。若。い。は。義。龍。を。助。け。忠。義。一。途。に。平
 と。道。三。つ。た。り。國。中。の。周。章。鼎。の。湧。り。一。般。さ。り。山。城。入。る。道。三。つ。途。に。在
 て。毛。を。食。齒。と。嚙。り。傍。り。不。老。の。逆。子。天。道。行。を。救。ひ。終。り。三。す。く。に。斬

まろしやうち
秘後義龍
が
暴悪二才と
討の刃



吉原日記



吉原日記

吉原日記

て棄どん飽息と信長は方々使者を以て援兵と謀り山と云
 不陣を以明日押寄んと軍勢と信長は謀り山と云
 送寄を押しせ兩軍矢石と飛て咄哉い主人又も既も敵たるのう
 それ以後は道臣國人親子昆弟亦引別は血肉相傷り父子相食ふ
 國ひれは状哉國の人心とは云々が後様よりまた之道三勇丸凍たる
 老將鞍を以て諸軍より知して在り不に後来りて胸板を破るる春
 で屋と云の老人といふものもなれば須臾も堪はれ馬の尻で息絶る
 依り道三の諸軍は角八面は敵より首を以て小巻源を討たる。計日
 目を移して下働きの義龍が道臣の土奥回士即入即止り。渠比は
 き大かばて道家孫八と出合忽孫八を紐伏首を搦んとする小右手指
 落てさうじうがはとて首とぬ者くと首引抜り頭皮延て二言ふに
 後出を捻首はてきてる人の首首を抜とつる右今様あるき振舞

武名後の世に傳へべきを君も送らふ合戦のたて斯る働せし心と
 よと心ある者眉といそめぬらうらう

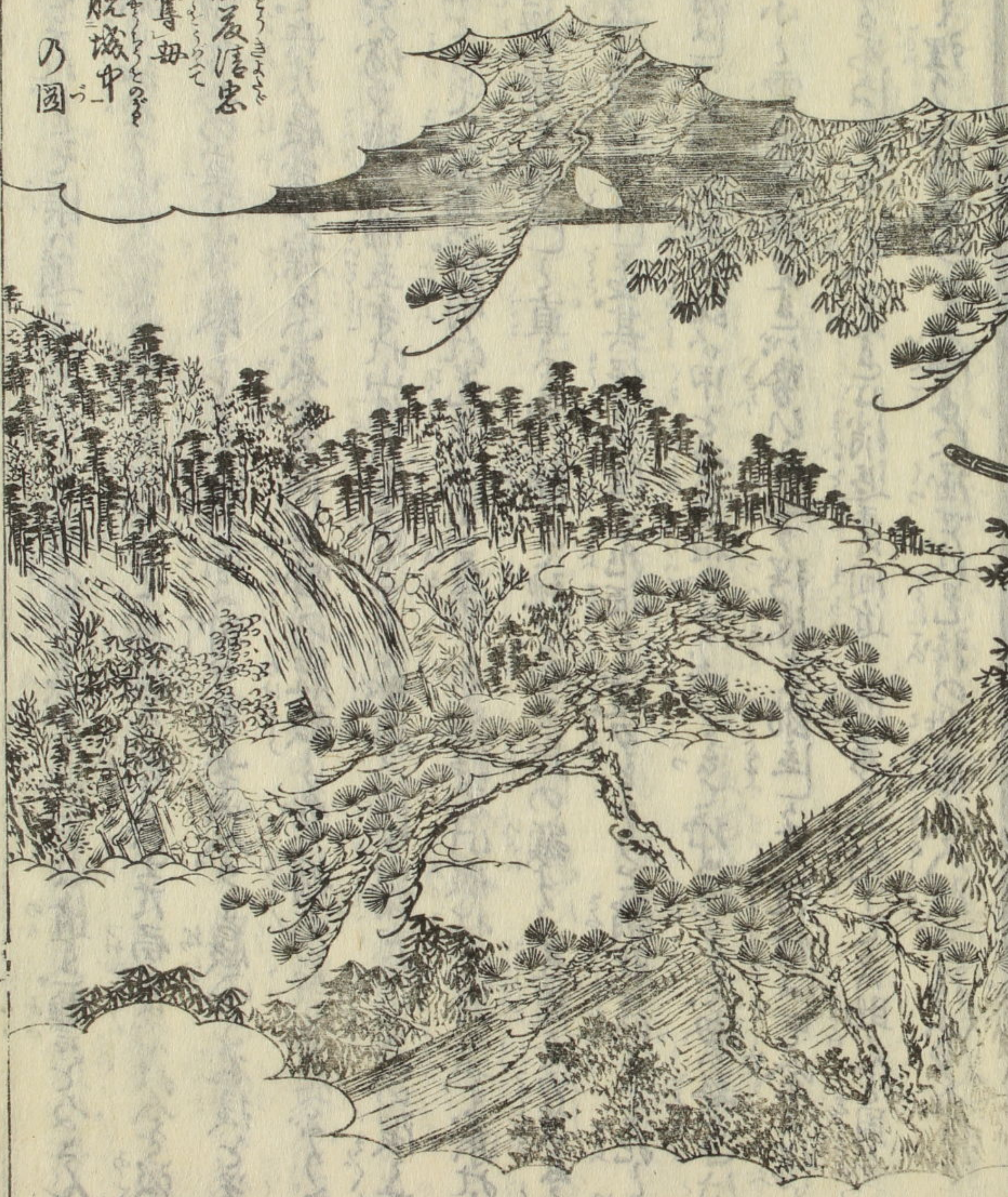
隆治城降法忠奪慈母條

孫後治部を捕既二身を殺信又とて以て又た心を顧ざる軍は皆
 義龍も降りふいふは屬城を守り勇士も老親妻もと本城を傳り
 敵て背を振り後二圍軍均もどけりくる。又加後彈正老將門法忠
 もまた幼今須城中心にけ強勅をば嘆嘆道三も力を加へんのをと用
 意を以てたる不は。月廿日の晩系も入道矢も申して長期と遂終ひぬと
 教を放て啼泣し手の糸足は踏不は忘る。外も又三べき君の系同て
 りたり。今須に在るの今も皆入道重恩の軍と云。今も義龍の威風
 恐怖。降参して命と命をせん計入たり。不詮放はべき手限らう。統
 らがて飽と云い入道の電養と説りるが。不義と知りく其福と辨ん

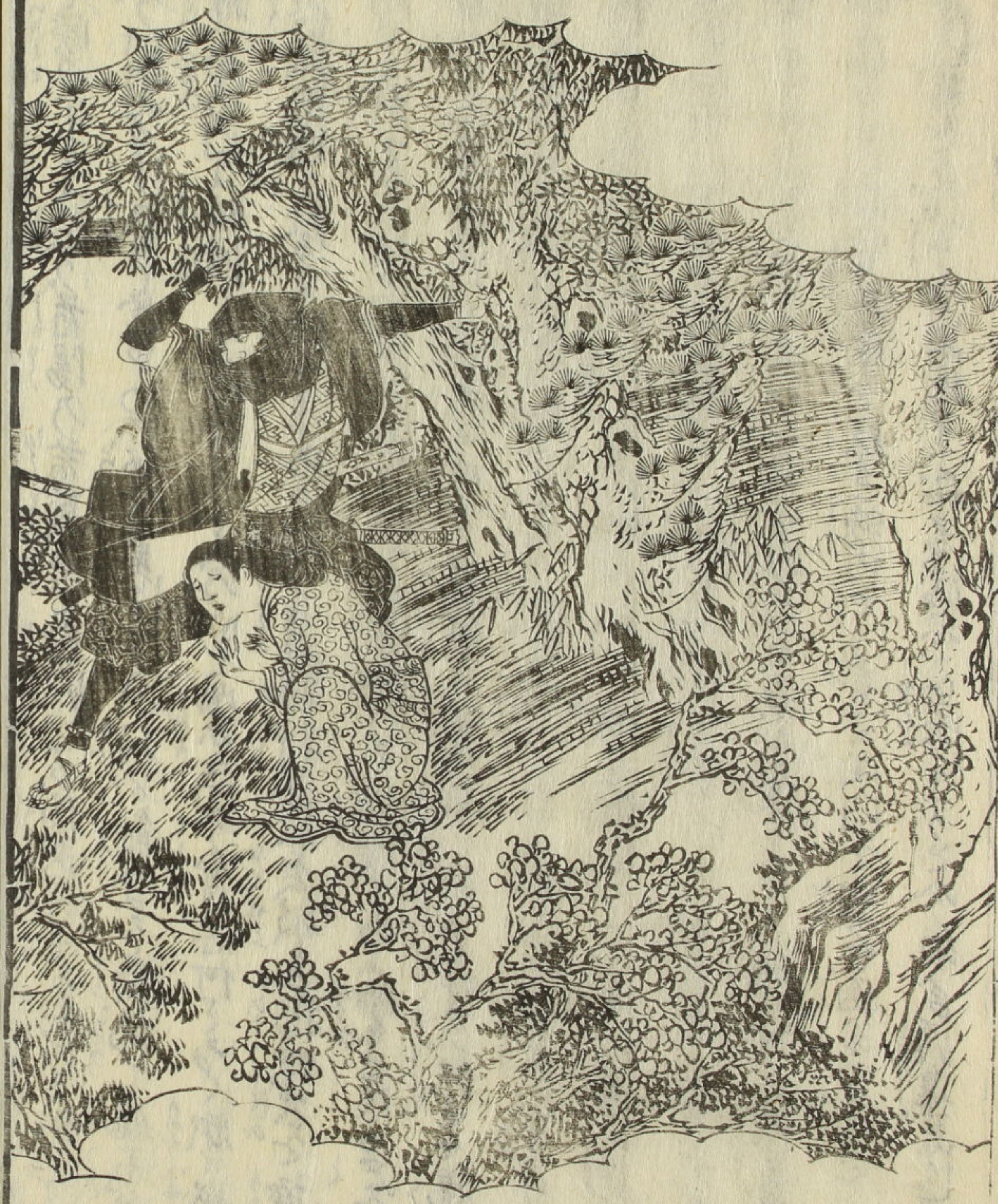
り。我士仁くはたざる石るれが速よりを遠よりは如ドと一歩の世の。其
 母を後人傑として入臣」といほ降降奪奪人の安々九一日も不承れ福
 勝を長六勇士心は勝るあり。行はして母と遠を行かうの地は、牙と區し
 二石の西赤と食して。日月廿八日、今頃の城を忍び出、其夜獨福系山にまうり
 め、先准の計と事とる。凡べき方便あり。日不塔立寺山と云、福系山の
 南は隣り、峯嶺は忍び入、容易く入べき便あり。妻内、兼て渡りて、凡か
 係るよ、及ぶを結成と攀城の手を要し、城を右幸道で、城中に入ると知
 人、又よ、まうり。却た加、及、法忠が、母、園法、法、即、兼、若、女、人、の、貞、靜、よ、り、
 心の探、密、く、年、い、ま、に、十、に、足、と、脱、は、法、忠、と、役、け、て、より、後、渠、が、成、仁、の、ふ
 後、い、子、と、教、る、れ、る、い、西、河、王、陵、が、母、は、忍、び、入、り、た、る、思、は、れ、の、大、院、は、せ、ま、の
 風、と、為、し、と、朝、文、心、と、い、ひ、ら、う、死、は、け、は、義、龍、が、父、を、殺、し、て、後、諸、士、の、人、質、と
 不、動、を、れ、が、歴、々、は、勇、士、の、妻、の、思、念、は、心、割、と、石、を、以、て、牙、を、振、り、と、る、か

し、傍り、十、か、ま、あ、り、首、陽、の、昔、藏、道、て、餓、死、する、伯、美、昆、弟、が、移、ひ、は、倣、ん、ま
 今、け、耐、之、多、し、曾、て、城、中、の、粟、を、賣、し、と、け、程、か、飲、食、を、断、つ、て、病、を、と
 程、高、の内、は、外、洗、て、居、ら、う、う、人、の、心、ぞ、切、系、き、今、宵、心、何、と、う、脚、城
 以、の、松、風、凄、々、な、る、胸、を、と、ら、は、け、耐、の、を、れ、打、き、に、後、破、と、獨、焼、火、を、撥
 あ、る、お、こ、を、け、し、雨、の、外、は、人、の、足、音、幽、は、て、風、凜、と、つ、し、郷、を、と、た、ま、を
 押、開、き、入、来、る、者、あり、源、義、朝、は、終、る、ま、腹、は、耐、の、股、引、利、後、装、ひ、以、て、揚
 深、の、角、段、巾、と、頂、き、短、と、卑、めて、大、人、美、た、く、入、せ、終、る、乳、と、其、短、耳、に、是、あり、
 我、子、ち、ら、び、や、噯、人、我、承、る、所、整、靜、に、と、是、を、時、立、側、近、く、は、考、行、ら、耳、の、
 考、て、細、語、に、ぞ、母、を、歎、ひ、斜、ら、び、煙、を、吹、消、甲、斐、く、く、母、を、と、結、ぶ、て、人
 質、廓、論、の、海、と、名、る、石、壁、は、は、笹、箒、の、丸、糸、を、縁、か、お、く、竹、ひ、り、増、三、寺
 山、よ、出、る、い、西、嘗、若、春、を、脱、は、鶴、の、と、う、者、は、関、門、を、用、せ、函、谷、の、危、き、と、出
 け、若、を、忍、ん、べ、け、耐、城、中、は、加、及、法、忠、が、出、渡、し、と、今、頃、の、後、進、来、り、と

加辰信忠
奪母
脱城中
の園



清正記初編卷二



清正記初編卷二

三十一

ござんがこそ渠の道三へなれか居る人候を盗り他國へ遣す。體言となんを
 謀り知れり。人候の局くと改めんと。廓輪を致す兵士九局長を改め
 清忠が母の室と穿鑿せしむ。少少の向う即ち下中敷人ぐく候へく。左後と美人
 兵九段候を探る小夜宴の内早輝の脱穀とめて婦人の教り入れりき。
 乞の城申強き端を寺山修ひを遣りするも知れり。次と諸士候一山の隈より
 本と分て机需め。松明は光さす。昼のどく。清忠は形仕をたつかせ。東北方
 碓氷の地の道三と直よ。あたに候とて地とねと岸の懸り。差繩を力まよえ
 世平より地より。其候も崖を飛拍とて。短刀と有り。朝脱落ると飛。一
 脊はて。白双右脚の跡。甲と身き。拙出する。呼とて。地へ倒ると。母の驚き。い
 いふと。雲透は短刀をさし。勢ひは。逼り。張際と踏居。元僥倖は。て。余は。傷ま
 る。る。不。足。り。小。丸。も。心。消。退。手。間。道。く。逐。来。る。小。付。て。助。人。と。周。多。き
 り。も。理。う。く。清。忠。は。し。も。痛。も。に。屈。せ。ば。是。神。の。世。痕。大。人。膝。ぎ。流。れ。り。と。い。ふ。

短刀と短刀を喉に刺し。本と依て杖。は。言。と。さ。る。瓜。需。め。幸。は。て。尾。張。

織田尾陽清忠生清正條
ハヤノヨキシにしてまよふまよふとてらむ

斯てが。及。彈。正。丸。清。門。清。忠。は。兵。國。を。脱。して。後。尾。張。國。尾。智。那。中。村。は。終。
 母。が。獨。り。の。人。農。具。雑。工。を。業。と。して。其。名。は。清。忠。と。呼。ば。れ。り。生。後。は。安。ん。
 十七。親。母。の。し。る。か。ま。が。ま。の。戀。は。り。俄。初。は。令。懐。と。思。ひ。し。其。後。川。と。然。
 涙。を。流。り。水。根。痛。の。如。く。痛。む。甚。く。果。して。破。傷。風。と。ぬ。り。趾。指。悉。く。爛。と。腫。
 ぬ。く。は。て。齋。は。患。る。つ。つ。と。丸。形。歩。杖。に。倚。り。杖。が。杖。に。從。つ。て。父。親。は。終。
 ら。く。今。の。身。を。纏。固。と。き。運。と。と。世。と。傳。め。初。の。若。の。居。り。居。る。を。負。め。兵。
 備。は。留。ひ。て。雑。工。の。業。を。言。ひ。母。は。訓。う。る。や。ん。が。と。傳。へ。ま。と。助。け。弘。治。
 三。年。八。月。に。清。忠。清。忠。が。女。を。娶。て。妻。と。す。富。る。し。と。何。り。候。と。其。日。と。選。り。
 傳。り。は。

の九月と云記する事ぞ於て男が家に後子謙那信を誘ふと名を改
 め家職を奪うなりと云る永禄八年壬戌六月廿二日其妻田方と出
 せり。産後後で悩むゆへは是を三勝とて肯格懐憚りく終るまで
 のび腫解はしと涙を悲じたるごとく。秘智女はて家を賣くむりり
 隣家老婆婦女は来り警むと云ふ者なり。又信を誘ふの款はるる
 らば。初名を虎と助後に加ふる計院と云

傳曰。説く甚多く其妻信忠は嫁して後既乙未年及ぶと云ふ一子まき
 めを秋き日郷の内よ多門天王の社あり。そよ移てせりとも。又一説は靈
 符を勝王の法と傳へ。保て奇情の靈を感ふ。其後懐胎して十二月
 を経てせり。其況多流と云ふ。皆信用志と云ふ事なり。然も既乙
 丑庸よりしるるの必然之才機武勇自ら具り。卑儀より起り。初め百七

十石の隊をひいて。僅よ三十年に回ると云ふ十石の天地と伝へ。勇名と接
 業六十八州を夷はのち。後朝鮮は後海へ。七ヶ年の間を朝の諸侯致
 功をかりしゆ。中に抽である功い人一人を止めり。猶徳相良の諸
 部を別と二手の勢をひて小道を進む。小道の天後釋克滅を虜は尚
 小道へ流し入る。二十七日路が向。諸部のつぐを顧す。會寧府を抄ひく
 徳海君順和君と云。朝鮮王は西王とて生捕と云。其方一人をひて威後
 道二十二縣の地を抄略へ。安邊府の城郭を築き。其後我國の勢
 十万余騎して王城を在る。大明百万の勢を丸圍と云。其後稍く一
 万人の兵をひて救ひして来り。忽大明百万騎の中を疾撃し。款を
 尾のくく。碎き兵糧を奪えり。味方此飢を助け。蕭山の戦ひは。
 麻貴李如松。李芳春等が魂魄を落し。斗り。大明の勢を悩む。是
 により。大明朝鮮のあふ。或は待り。他て往き。或は休にして。祭らる。之
 萬曆以来。明朝朝鮮の書は。信正朝臣の名を録し。つらりあけて

算合ふ不違又此比まを朝鮮國慶尚道全羅道の海邊水軍
乃舊志とる水營又軍官た私艦を聚め海より出一年二冬
宛海津系とのみをもめ及大方る葛人形又甲冑と着せそ
討く海に沈む被囚れ人の秘して語らばとるも往昔は正朝
臣の勢は強く敵一どりし時調伏の系の遠りたる多しとや
其人形とるの信正なり後乃世まを能く討る者とのみとる
祚威を聚え終又討中る者なりしが何の以るや一人大膽の討人
ありてこれを討ありしふ朝鮮王より比なき勇士なりとて殺し
褒賞を賜りしと忽其疾程人となり躍りて飛去りたまぐの
まついつく荒道りしとふ其親戚も大きふ恐は信正朝臣の靈
をあり種く飛を附しとるは其後人心討よりとる是より後
も其葛人形を討る者一人となりしが其後又例の系の日に水
營の私艦を出し人像を討んとする時一天雲起り風驟しく

吹き海と波濤山のくはより私覆り人死とるや母ひけしりし
らば是より信正の祟りととる畢又けありの絶たるとは是等の
死後の世まを神靈かく奇特ある人はしすし海に何ぞ鬼神の
再生ありとるや申す母もふ恐るべき事ともなり尚懐胎の
幸蹟など委ふ後條の文解と記ししけ石の譯の遙く後の
とるとの大因と母を終りし是よりなり

此詩乃龍舟集卷三之三十六畢
其詩曰
龍舟集卷三之三十六畢
其詩曰
龍舟集卷三之三十六畢
其詩曰

